

平成 30 年度
高知大学国際連携推進センター一年報

平成30年度 年報目次

| | |
|---|----|
| 国際連携推進センター基本方針..... | 3 |
| 1. はじめに (国際連携推進センター長 新納 宏) | 8 |
| 2. 組織・スタッフ | 10 |
| (1) 組織図 | |
| (2) スタッフ紹介 | |
| 3. 活動状況..... | 11 |
| 3-1 国際交流 | |
| (1) 講演会等 | |
| ① 「日本語・日本語教育研究の新視点ーコーパスから得られる言語事実を立脚点としてー」石川 慎一郎 (神戸大学・教授) | |
| ② 【教職員対象】海外危機管理セミナー及び【学生対象】海外渡航危機管理セミナー (河内浩樹・東京海上日動火災保険株式会社・公務第2部課長) | |
| (2) 学長等表敬訪問等..... | 13 |
| ① 在大阪オーストラリア総領事による学長表敬訪問 | |
| ② タイ・カセサート大学学長御一行による学長表敬訪問 | |
| ③ メキシコ・サルディョ工科大学からの学長表敬及び協定更新に係る調印式 | |
| ④ SUIJI 国内サービスラーニングプログラム学生の理事(教育・国際担当)表敬訪問 | |
| ⑤ 南ベトナム農業科学機構副局長らによる学長表敬訪問 | |
| ⑥ ベトナム ビン大学学長らによる学長表敬訪問 | |
| ⑦ パルティド州立大学副学長一行による理事(教育・国際担当)表敬訪問 | |
| ⑧ 陝西科技大学環境科学及工程学院長による副学長(国際連携担当)表敬訪問 | |
| ⑨ さくらサイエンスプランによる理事表敬訪問 | |
| (3) JICA 受託事業..... | 18 |
| ① JICA 課題別研修「インクルーシブ教育実践強化」コース | |
| ② JICA 課題別研修「“子どもの学びを保障する”へき地教育の振興ーSDGsの達成に向けて」コース | |
| ③ JICA 課題別研修「島嶼国総合防災行政 (B)」コース | |
| ④ JICA 青年研修「バングラデシュ防災」コース | |
| 3-2 留学生交流..... | 23 |
| (1) 留学生交流事業 | |
| ① カルチャーカフェ (第26回~32回) | |
| ② 本学留学生による北川村日本遺産モニターツアー | |
| ③ 2018年度外国人留学生課外研修 | |
| ④ 第3回学長杯日本語スピーチコンテスト | |
| ⑤ International BONENKAI | |

| | |
|---|-----|
| (2) 地域交流事業等..... | 3 4 |
| ① 県立高知追手前高等学校にて留学生による「異文化理解講座」 | |
| ② 夏休みこども教室（高知市立はりまや橋小学校） | |
| ③ 朝倉地区区民運動会 | |
| ④ 「日本の伝統の暮らし体験」（大豊町） | |
| ⑤ 高知南高等学校国際科インターナショナルデー | |
| ⑥ 朝倉小校区青少年育成協議会主催料理教室「中国料理に挑戦」 | |
| (3) 留学生支援..... | 3 8 |
| ① 新入留学生オリエンテーション | |
| ② 帰国準備説明会 | |
| (4) 短期プログラム受入事業..... | 4 0 |
| ① 協定校向け英語によるサマーコース | |
| (5) 海外派遣留学支援..... | 4 1 |
| 海外留学説明会（第1回～第4回） | |
| (6) 国際交流基金助成事業..... | 4 2 |
| ① 平成29年度高知大学国際交流基金助成事業報告会及び平成30年度第1回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式 | |
| ② 平成30年度第2回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式 | |
| ③ 平成30年度第3回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式 | |
| 4. 進学説明会..... | 4 4 |
| ① アクセスリード大学院説明会（5/17 東京） | |
| ② アクセスリード大学院説明会（5/22 大阪） | |
| ③ ジーバック2018年外国人留学生相談会（7/5 岡山） | |
| ④ 2018年度外国人学生のための進学説明会[JASSO]（7/14 大阪） | |
| 5. 日本語授業関係（授業時間割、シラバスなど）..... | 4 6 |
| 6. 出版・刊行物等..... | 6 1 |
| Welcome to Kochi University、Annual Bulletin（英語）、高知大学留学生教育 第12号、高知大学国際交流 HP、Facebook | |
| 7. 会議関連..... | 6 6 |
| 国際連携推進センター運戦略室会議、国際連携推進委員会、留学生専門委員会 | |
| 8. その他..... | 7 0 |
| 交流協定締結一覧（大学間・部局間）、外国人留学生在籍（国別）、外部資金獲得状況資料 | |

高知大学 国際連携推進センター基本方針

設置の経緯

国際連携推進センターは本学の各部局等と連絡の上、教育・研究交流、国際協力プロジェクト及び留学生の受入れ、本学学生の海外留学・派遣などを司る。本センターは、国際プロジェクト部門と国際連携教育部門から成り、中国語センターを附置する。

新センター設置にあたり、高知大学におけるこれまでの取組み【国際交流ポリシー（平成18年4月12日役員会決定）ならびに国際交流のあり方懇（平成20年11月20日）の報告】を踏まえて、国際連携推進センターの新しい基本方針を策定し、業務の方向性を示す。

国際連携推進センターの基本方針

1. グローカルな国際連携を目指す

高知県と同様の開発課題を抱えるアジア・大洋州等の開発途上国とのつながりを重視し、教育、研究、国際貢献の面で重点化を図っていく。地域と共に学び研究する「知の拠点」として、地域から世界に発信する大学を目指す。

2. 双方向の国際交流を推進する

留学生の受入のみならず、本学学生の海外留学の促進に重点を置く。ワンストップサービスを強化し、海外からの優れた留学生受入れを増やす。日本人学生と留学生が集い、互いに学びあうキャンパスを創造する。

3. 地球規模の課題に対する国際協力にチャレンジする

本学の研究シーズと高知県の地域資源の特徴を生かして、国際協力を推進する。国際協力の現場を教育・研究の場としても活用し、実践的で国際的な教育・研究を発展させる。

基本方針を具体化する活動

国際プロジェクト部門

1. 国際連携の分野・地域を重点化する

- (1) 教育、研究、国際貢献すべての側面において都市部の有力大学、大規模大学との差別化をすすめ、高知大学にしかできない、あるいは高知大学が比較的優位にある教育研究分野を明確化し、海外へ発信していく。例えば、分野としては高知県の課題解決と直結する①実践的な農業及び食品加工、②海洋資源の利活用、③防災・気象変動・環境、④保健・医療、⑤学校教育、⑥地域の社会・経済開発などがあり得る。
- (2) 将来の教育・研究の国際的なネットワークを強化するため、留学生受け入れにあたっては、協定校はもとより、本学の重点地域である黒潮流域圏を含む東南アジア、特に若年人口が増大を続け、高等教育への需要の高い国々からも、将来性のある優秀な学位取得を目的とする留学生を積極的に受入れる。

2. 国際交流拠点を中心に国際的な研究を推進する

- (1) 高知大学ならではの分野・地域における研究交流を促進するため、国際化戦略経費を重点配分し、外部資金を獲得できるよう支援する。配分にあたってはネットワーク型、文理融合型のプロジェクトを優先する。
- (2) 文理融合の研究交流や国際協力の促進を図るため、国際化戦略経費の一部をあてて、国・県の政策や計画とすり合わせて特定の研究テーマや対象地域を決め、関心ある研究者を公募して調査を行い、国際的な共同研究を発掘する。

3. 国際協力に積極的にチャレンジする

- (1) 教員の研究成果を国際協力に生かし、ODA 資金による国際協力活動を活発化させる。特に JICA による途上国行政官向け国際研修は、直接途上国政府とのネットワークを強化し、海外事情に容易にアクセスできるため、積極的に開発・実施する。実施にあたっては、学生に国際協力を体験させるなど、教育面での活用も考慮する。
- (2) 国際協力活動は、国際貢献の面のみではなく、教育・研究に様々なメリットがあり、本学の目標の遂行に不可欠である。そのため、教職員の国際協力活動が正当に評価されるような仕組みを作る。
- (3) 国際協力事業を形成するにあたっては、国内においては高知県の自治体、企業、NGO との連携、また、海外においては協定校との協働も視野に入れて、ステークホルダーを巻き込んだ案件に配慮する。このことによって、地域連携や協定校との連携がさらに促進される効果が期待できる。

国際連携教育部門

1. 高知大学からの留学生派遣を増やす

- (1) アジアの協定校からの留学生受入数に対し派遣数が少ないことから、アジアの英語共通語圏（フィリピン、マレーシアなど）の協定校への留学生派遣を増やす。また中国語圏の協定校への派遣を増やす。
- (2) 協定校への留学生派遣を増やすため、協定校情報の整理とパンフレット、イントラネットでの発信を強化、また学生向けセミナーを多重的に開催するなど、学生の関心を高める。
- (3) 留学希望者の英語力アップのため、学部等と共同で TOEFL 等対策講座の開発や支援を行うとともに、派遣数増加のために有効活用する。
- (4) 中国語センターを活用して、中国留学への学生や保護者の関心を高め、学生の中国語力をアップさせる。

2. 日本人学生等と留学生が共に集い、共に学ぶキャンパスを創造する

- (1) 留学生向け行事は、日本人学生も参加可能とし、学生たち自身の企画を取り入れる。
（例：日本語スピーチコンテスト、留学生による協定校紹介セミナー、学外への合同研修旅行など）
- (2) 高知大学ポータルサイトの国際関連部分は英語対応とし、学内のサインや看板も日・英2か国語併記とし、留学生に優しいキャンパスを実現する。
- (3) 日本人学生等と留学生が、常時集い情報交換できる交流スペースを確保する。交流スペースには、コンピューターや外国語雑誌、留学情報などがいつでも見られるよう整備し、留学生向けビジョンボックスを置く。

3. 留学生獲得から受入れまで、ワンストップサービスを強化する

- (1) 留学生の獲得に当たっては、協定校からの短期留学のみならず、質の確保を前提に JICA 留学生（修士）や私費留学生、国費留学生など長期留学生を積極的に獲得する。そのために国際連携推進センターは、留学生向けの広報ツール（外国語によるウェブサイト、パンフレット、DVD など）を開発し、国内のみならず海外での留学フェアに参加し海外大学での説明会などを開催する。また、学術交流等で海外の大学等へ出張する際にも、留学生勸奨のための活動を行うことを促進する。（例：国際化戦略経費の申請項目にも留学生獲得努力を追加するなど）
- (2) 教員の留学生受入/派遣の事務的負担を減らし、留学生の利便性向上を図るため、留学生受入/派遣事務は、国際連携推進センターがワンストップサービスとしての役割を担う。また、教員向け及び留学生向けの受入手続マニュアル、留学希望者向けの留学マ

ニュアル、留学生受入/派遣危機管理マニュアル等を整備しイントラネット、インターネットで公開する。

- (3) 留学生の危機予防のため、ブリーフィング、コンサルテーションを強化する。
- (4) 留学生向け宿舎確保は、混住型学生寮の整備を推進するが、当面は宿舎の借上げや宿舎提供サービスの外部委託などを検討する。

活動を可能とするための学内体制の整備（今後1～2年）

1. 国際連携推進センターに、プロジェクト形成や研究交流促進のために国際経験豊かな専任教員や事務職員を配置する。また、増大する業務に対応するため、国際連携推進センターが獲得した資金の中から、必要に応じて機動的に臨時スタッフを雇用して事務補助に当たらせる。留学生受入での宿舍手配などの定型業務は、可能な限り外部委託する。
2. 国際担当の専門人材を計画的に育成するため、事務職員の海外交流協定校への派遣等も含め研修プログラムを充実する。
3. 学術交流やプロジェクトの分野を絞り込み文理融合を進めるため、国際連携推進センターとして外部資金の獲得に努めるとともに、国際化のための戦略経費を増加する。国際化戦略経費は期限付きとし、あくまでも外部資金獲得の呼び水として使う。事業は毎年評価を行い、留学生獲得への貢献、外部資金獲得の努力等も評価項目に入れる。
4. キャンパスでの国際交流促進のため、他の地方国立大学並みに増床し、各教員の研究室の他に留学生交流スペース、留学生カウンセリングルームを確保する。
5. 高知大学海外事務所の整理と機能強化を進める。優秀な留学生の獲得、学術交流や共同研究の促進、同窓会の組織化と支援、国際協力プロジェクトの形成などの機能をもたせる。そのために、教員の派遣を伴う海外事務所の設置を検討する。
6. 海外での留学生同窓会組織を育成・強化し、海外へ派遣する本学留学生や教員との親睦を深め、高知大学の最新情報、最新の研究成果の情報を提供する。同窓会ネットワークを活用して、本学の広報と留学生の募集への協力等を依頼する。
7. 学内各部局の国際連携を促進するために、全学的な国際戦略を明確化して外部公開するとともに、部局ごとの国際戦略策定を促進する。国際連携推進センターは全学的な国際戦略策定の事務局となるとともに各部局の策定を支援する。
8. センターには各部局からの兼務教員を置き、情報共有を促進する。

1. はじめに

国際連携推進センター

センター長 新納 宏

キャンパスから外に出よう！

4月、今年も間もなく留学生がやってくる。国際センターにはしばらくスーツケースを抱えて右往左往する留学生の姿が見られる。これから半年長くて4年間、異国の地、高知に住むのだ。観光旅行的な高揚感は1ヶ月も立たないうちに萎み、カルチャーショックによる失望や不安の時期が始まる。そんな時期に大学に友人ができ、地域の人と知り合い助言をもらうと、徐々に適応期に向かっていく…

留学生は到着後、すぐに高知大学が狭いのに驚くらしい。そこで海外の協定校の様子を少し見てみよう。

協定校に出かけると、その大きさにビックリすることが多い。例えばマレーシアのプトラ大学。大学構内で学生の車に乗せてもらっているうちに、ウトウトと眠ってしまった。ハッと目が覚め、今どこか聴くと「まだ大学の中」だそうである。この大学には何とゴルフ場、乗馬クラブすらあるのだ。クアラルンプール郊外のこのセダンキャンパスのみで1108haあるそうだが、何と東京ドームグラウンドの855倍である。もちろん構内移動はバスか車だ。坂もあるので自転車ではちょっときつい。

タイのコンケン大学も巨大だ。大学の中に街があるという感じ。マーケットも郵便局も食堂も病院もある。900haだから、東京ドームグラウンドの700倍近い。タイで最も広大なキャンパスだ。アジアの大学は都市部と地方部では異なるが、とにかく大きい。

この2つの大学はその国で最も広いのでちょっと別格としても、米国テキサス大学ダラス校の180haも東京ドームグラウンドの140倍。当然構内は車で移動だ。そもそもダラス空港に到着したときからビックリだった。手荷物受取建屋の一番向こう側が霞んで見えるのだ。迎えの車がどこに着いているのか、探すのも大変だった。テキサス州だけで日本よりも広いのだから、当然といえば当然である。この大学では毎日、地平線に太陽が沈むのをみながらホテルまで帰った。

ヨーロッパの大学はやや趣が異なる。スウェーデンのイエテボリ大学は街なかにキャンパスが散在しており、しかも、街と大学の区別がない。歩いているといつの間にかキャンパスだ。街と一体化しており、面積が広いか狭いかという問いは適さない。これはもともと歴史的に街の中にあっただ様なカレッジを編入しながら大学が発展してきたからだと言う。

さて高知大学だが、メインキャンパスは何haだろう。約16haだ。地方の中規模大学は高知大学とだいたい同じぐらいだろう。広いキャンパスから来た多くの留学生から見るとかなり狭い。食堂も売店も昼休みはごった返す。コモنز的なスペースも少ない。

そこで留学生には是非キャンパスの外にも目を向けてほしいと思う。高知の人は外国人でもすぐに（日本語で）話しかけてくれるし、一旦家に客を迎え入れると、なかなか帰してく

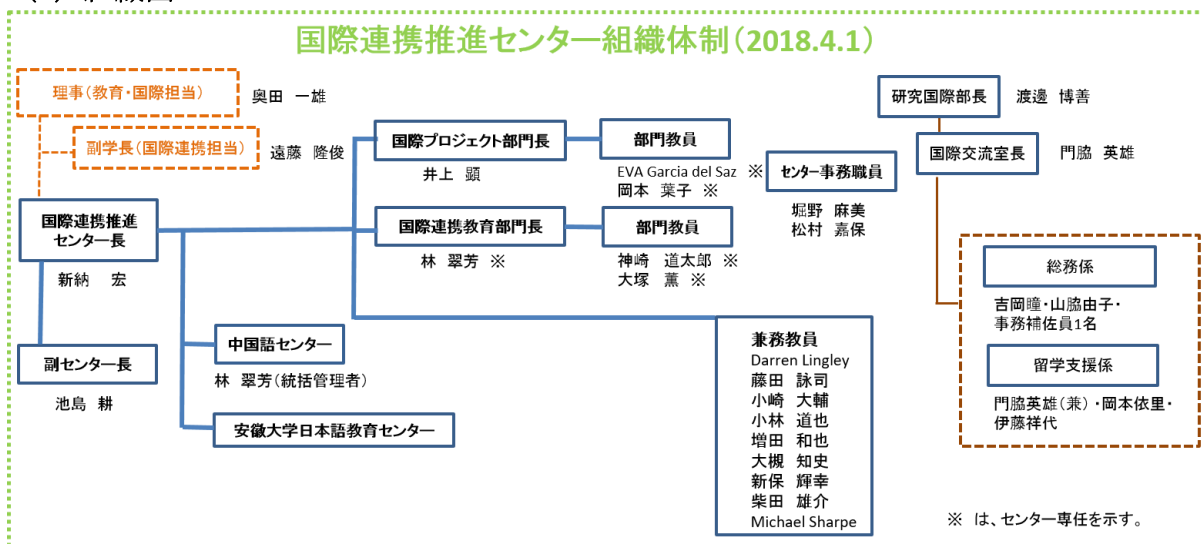
れないほどお客好きだ。幸い大学前からは土佐電鉄や JR が市街地や郊外に向かって走っている。地元の魅力も含めての大学だ。

国際連携推進センターは 2018 年度からから共通教育の正課で、日本人と外国人と一緒に地域を体験できる「地域課題体験プログラム」を行っている。キャンパスの外に出て、地元の人と触れ合いながら、高知のいいところと抱える課題を学んでもらうためだ。課題先進県高知を知れば、10 年後の日本も考えることができる。

また英語圏協定校向けの文化体験サマープログラムも定例化してきた。その他、高知大学では、準正課の「えんむすび隊」をはじめ、多くの地域探求プログラムを用意している。留学生よ、キャンパスから外に出よう！

2. 組織・スタッフ（組織図、スタッフ紹介）

(1) 組織図



(2) スタッフ紹介

副学長（国際連携担当）
国際連携推進センター長
副センター長

遠藤 隆俊
新納 宏
池島 耕

[国際プロジェクト部門]

国際プロジェクト部門長
国際プロジェクト部門専任教員（助教）
国際プロジェクト部門専任教員（特任講師）

井上 顕
GARCIA DEL SAZ EVA
岡本 葉子

[国際連携教育部門]

国際連携教育部門長・専任教員（教授）
国際連携教育部門専任教員（准教授）
国際連携教育部門専任教員（准教授）

林 翠芳
神崎 道太郎
大塚 薫

[研究国際部国際交流室]

国際交流室長/兼国際連携係長

門脇 英雄

[国際交流室総務係]

国際交流室総務係長
国際交流室総務係員
国際交流室総務係員 事務補佐員

吉岡 瞳
山脇 由子
1名

[国際交流室留学支援係]

国際交流室留学支援係主任
国際交流室留学支援係員

岡本 依里
伊藤 祥代

[国際連携推進センター]

国際連携推進センター係員
国際連携推進センター係員

堀野 麻美
松村 嘉保

3. 活動状況

3-1 国際交流

(1) 講演会

①講演会&ワークショップ《日本語・日本語教育研究の新視点—コーパスから得られる言語事実を立脚点として—》を開催

日時：平成30年5月26日（土）13:30～17:10

概要：日本語教育等への理解を深めることを目的とした、高知大学国際連携推進センター主催の講演会及びワークショップが行われました。

講師には、神戸大学（大学教育推進機構／国際文化学研究所）教授石川慎一郎氏をお招きし、「日本語・日本語教育研究の新視点—コーパスから得られる言語事実を立脚点として—」という演題でお話をうかがいました。当日は梅雨入り直前の爽やかなお天気に恵まれ、高知大学教職員、日本人学生、留学生のほか、県内から多くの方に参加していただき、合計60名を超える参加となりました。

講演会では、コーパスとは何か、コーパスの意味と変遷、コーパスの定義について紹介された後、コーパスを活用した実例の分析データについて説明され、聴衆者一同興味深く聞き入っていました。ワークショップでは、エクセルを用いて統計処理の実践的な演習を行っていただきました。

今回の講演会及びワークショップの参加者からは、「講師の話がわかりやすかったです。内容も奥深くて、自身の見識が磨かれた気がします」、「とてもわかりやすく、コーパスのことを学ぶことができました。コーパスで誤用研究がしたくなりました」、「石川先生が作りたい辞書をととても楽しみにしています」、「メリハリのあるご講演で楽しく学ばせていただきました。『石川現代日本語辞典』が出版されるのが待ち遠しいです」等の感想が寄せられました。



講演会会場の様子



ワークショップ会場の様子

②「【教職員対象】海外危機管理セミナー」及び「【学生対象】海外渡航危機管理セミナー」を実施

日時：平成30年12月5日（水）

概要：本学の朝倉キャンパスにおいて、東京海上日動火災保険株式会社公務第2部の河内浩樹課長を講師としてお迎えし、第1部を教職員対象、第2部を学生対象とした「海外危機管理セミナー」を開催しました。

まず、第1部「【教職員対象】海外危機管理セミナー」には、学内教職員の他、高知地域留学生交流推進会議に所属する県内高等教育機関等の構成メンバーなど教職員32名が参加し、昨今の国際治安情勢、自然災害等の危機事象の増加・多様化を踏まえ、学生派遣の危機管理の視点から「学生向けオリエンテーション」実施にかかる要点を中心にお話いただき、具体的な危機事例や保険会社の役割について講演いただき、終了後にはインバウンドも含めた活発な質疑応答行われました。

続いて、第2部「【学生対象】海外渡航危機管理セミナー」には、交換留学派遣予定者や春季休業期間中に実施する短期派遣プログラム参加者を中心に20名の学生が参加しました。海外で日本人がトラブルに巻き込まれた事案の紹介や現地生活で注意するポイントなどの講義に、学生からは「気が引き締まった。事前に情報を収集するだけでなく、現地でも危ない地域は避けるなど気を配り、有意義な留学生活を送りたい」という感想が寄せられました。

【教職員対象】海外危機管理セミナー



【学生対象】海外渡航危機管理セミナー



(2) 学長表敬訪問等

①在オーストラリア総領事が櫻井学長を表敬訪問

日時：平成30年4月17日（火）

概要：在大阪オーストラリア総領事館総領事 David Lawson 氏が、櫻井学長を表敬訪問しました。

櫻井学長からは、「オーストラリアは本学学生にとって人気の留学先であるが、オーストラリアからも是非多くの学生に高知に留学してもらいたい」との話があり、大学間の交流を含めた今後の両国間の交流促進について意見交換が行われました。



表敬訪問の様子



集合写真

②タイ・カセサート大学学長御一行が櫻井学長を表敬訪問

日時：平成30年4月19日（木）

概要：本学の協定校であるタイ・カセサート大学より、Watcharinrat 学長ほか5名が櫻井学長を表敬訪問しました。

カセサート大学とは、教育・研究両面において活発に交流しており、今後の更なる連携協力について意見交換が行われました。



表敬訪問の様子



集合写真

③メキシコ・サルティジョ工科大学からの学長表敬および協定更新に係る調印式を挙

日時：平成30年7月10日（火）

概要：本学の協定校であるメキシコ・サルティジョ工科大学より、Juan Carlos Loyola Licea 副学長、Zully Matamoros-Veloza 教授らが櫻井学長を表敬訪問し、併せて協定更新に係る調印式を執り行いました。

サルティジョ工科大学とは、特に研究面において活発に交流しており、今後の更なる連携協力について意見交換が行われました。



協定更新調印式



記念撮影

④ SUIJI 国内サービスマーケティングプログラム学生の理事表敬訪問

日時：平成30年8月31日（金）

概要：インドネシア（ガジャマダ大学4名、ボゴール農業大学3名、ハサヌディン大学3名の計10名）とマレーシア（プトラ大学6名）からサービスマーケティングプログラム（以下、SLP）受講のため高知を訪れている留学生及び本学学生の計27名が、奥田理事（教育・国際担当）を表敬訪問しました。

奥田理事による歓迎のあいさつの後、安田サイト及び室戸サイトからの代表学生による活動報告があり、活発な意見交換などが行われました。

一行は滞在中、愛媛大学グループや香川大学グループのSUIJIサービスマーケティング履修者と合流し、最終成果報告会においてサービスマーケティングで得た知見を発表し、他大学グループの学生らと交流する予定です。

*SUIJI (Six-University Initiative Japan Indonesia) とは、上記インドネシア3大学と四国3大学の6大学のコンソーシアムで、熱帯地域における農業発展に関する教育研究を協働で進めることを目指すものです。



奥田理事より歓迎の挨拶



集合写真

⑤南ベトナム農業科学機構 副局長らが櫻井学長を表敬訪問

日時：平成30年9月11日（火）

概要：南ベトナム農業科学機構（IAS: Institute of Agricultural Sciences for Southern Vietnam）の Le Quy Kha 副局長ほか、南ベトナムの農業関係者5名が櫻井学長を表敬訪問しました。今回の訪問は、県内企業が展開する JICA の中小企業海外展開支援事業における「安心安全な営農システム（IC-MOCS）を用いた安全性の高い農産物生産技術の普及・実証事業」による関係者の研修の一環として実施されたものです。

高知大学では、農学分野でベトナムとの交流が深いこともあり、本表敬訪問ではベトナムが抱える農業の問題点や今後の本学とベトナムとの交流について意見交換が行われました。



意見交換の様子



集合写真

⑥ベトナム ビン大学学長らが櫻井学長を表敬訪問

日時：平成30年10月3日（水）

概要：本学の協定校であるベトナム・ビン大学（Vinh University）の Dinh Xuan khoa 学長ほか1名が櫻井学長を表敬訪問しました。

高知大学とビン大学は2018年3月に学術交流協定を締結し、農業や防災分野での研究交流を開始しています。本表敬訪問では他分野を含めた今後の更なる交流の可能性について活発な意見交換が行われました。



意見交換の様子



両大学長を囲んで

⑦パルティド州立大学より副学長一行が奥田理事を表敬訪問

日時：平成30年11月15日（木）

概要：本学協定校のフィリピン・パルティド州立大学より、Borromeo 副学長と2名の学生が奥田理事（教育・国際担当）を表敬訪問しました。パルティド州立大学とは2017年12月に協定を締結しましたが、既に活発な学術・学生交流が行われており、今後の更なる交流の可能性について意見交換が行われました。

また今回来日した2名の学生は、「高知大学国際交流基金助成事業」で支援を受け本学の人文社会科学部および黒潮圏総合科学専攻に約1か月間留学するもので、これから始まる留学生活に期待を膨らませていました。



意見交換の様子



Borromeo 副学長、奥田理事を囲んで

⑧陝西科技大学環境科学及工程学院長が遠藤副学長を表敬訪問

日時：平成31年1月8日（火）

概要：本学協定校である中国・陝西科技大学より、環境科学及工程学院 馬宏瑞院長ほか1名が遠藤副学長（国際連携担当）を表敬訪問しました。

陝西科技大学とは、本学の農林海洋科学部と理工学部を中心に活発な学術交流を行っていますが、今後は学生交流も含めた更なる交流の発展について積極的な意見交換が行われました。



意見交換の様子



馬院長(左)、遠藤副学長(右)を
囲んで記念写真

⑨さくらサイエンスプランによる理事（教育・国際担当）表敬訪問

日時：平成31年1月24日（木）

概要：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST: Japan Science and Technology Agency）の国際交流支援事業「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」（さくらサイエンスプラン）により招へいたフィリピン、台湾からの研究者、大学院生など10名が奥田理事（教育・国際担当）を表敬訪問しました。

このプログラムは、本学の大学院総合人間自然科学研究科黒潮圏総合科学専攻が、さくらサイエンスプランの採択を受けて、1月20日から27日にかけて行うものです。

今回は「持続型社会の構築を目指した沿岸・海洋管理研究最前線学」をテーマに、黒潮流域圏国の若手研究者を招へいし、我が国及び本学の最先端の海洋研究に触れ、講義や体験実習を通じて海洋科学技術への関心を一層深めていただくことを目的としています。

奥田理事からは、「本学及び高知県内での様々な体験学習を通して、充実した訪問にしてほしい」との歓迎の言葉が述べられました。



表敬訪問の様子



奥田理事を囲んで記念撮影

※科学技術振興機構（JST）「さくらサイエンスプラン」とは、産学官の緊密な連携により、優秀なアジアの青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指します。そしてアジアの青少年の日本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジアと日本の科学技術の発展に貢献することを目的としています。（さくらサイエンスプランのウェブサイト <http://ssp.jst.go.jp/outline/index.html> から引用）

(3) JICA委託事業

①JICA 課題別研修「インクルーシブ教育実践強化」コースを実施

日時：平成30年4月8日（日）～4月29日（日）

概要： JICA 課題別研修「インクルーシブ教育実践強化」コースを実施しました。

この研修コースは政府開発援助(ODA)の一環として、独立行政法人国際協力機構(JICA)から本学が受託し実施したもので、講義や教育現場の視察を通じ、自国で応用できるインクルーシブ教育の強化策を修得することを目的としています。今回、中南米10カ国からこの分野に携わる行政官および現職教員15名が研修員として参加しました。

研修では日本のインクルーシブ教育の専門家による講義を通して、日本のインクルーシブ教育および特別支援教育の制度について理解を深め、ディスカッションを通じ日本と自国を比較することで自国での課題整理を目指しました。また、高知県内の特別支援学校や小学校を訪問し、授業の様子や学校施設等の見学を行い、日本のインクルーシブ教育及び特別支援教育の現場を体験的に学びました。

17日(火)には、国際連携推進センター主催の「インクルーシブ教育国際セミナー2018」に参加し、インクルーシブ教育先進国の北欧や、インクルーシブ教育に積極的に取り組んでいるドイツにおける実践事例を学び、それぞれの自国におけるインクルーシブ教育の在り方について考えました。

研修の最後には研修員がそれぞれの自国におけるインクルーシブ教育について課題整理を行い、今後実践するアクションプランを作成し、今回の研修成果として持ち帰りました。

研修員からは「日本や北欧等の素晴らしいインクルーシブ教育制度を学ぶことができ、今後自国でインクルーシブ教育を実施していく際のモデルとしたい」、「インクルーシブ教育を強化するために日本で学んだ秩序や連携といった知識を導入していきたい」などの声があがり、高い評価を得ることが出来ました。

視察した学校からも「自分たちの実践を振り返る良い機会になった」、「海外にも同じ課題があることに気付いた」という感想が寄せられ、相互に学びを得られた研修となりました。



②JICA 課題別研修「“子どもの学びを保障する”へき地教育の振興—SDGs の達成に向けて (A)」コースを実施

日時：平成 30 年 8 月 30 日（木）～9 月 21 日（金）

概要：独立行政法人国際協力機構より JICA 課題別研修「“子どもの学びを保障する”へき地教育の振興—SDGs の達成に向けて(A)」を受託し、本学朝倉キャンパス等で同研修を実施しました。

本研修コースは、政府開発援助（ODA）事業の一環で、日本におけるへき地教育の現状や取組を学ぶことを通して、“子どもの学びを保障する”ための自国の抱える課題に対する解決方法を見出すことを目的としています。

2014 年から年 1 回実施し、5 回目となる今回は、へき地教育に携わる開発途上国の行政官や現職教員など 10 ヶ国 12 名の研修員の参加があり、大学や高知県教育センターなどでの講義に加え、四万十町立七里小学校や本学教育学部附属小学校などにおいて、講義で学んだ教育行政や教育制度の理論を実践する場を視察しました。また講義や視察を通じて学んだことから実際に指導案を作成し、それをういた模擬授業を実施することによって実際の教育現場で行われている複式学級の指導方法を体験的に学ぶことができました。このような理論と実践の組み合わせによる参加型学習を取り入れた研修設計は、研修員による事後アンケートの結果等でも高い評価を得ました。

研修最終日には、本研修での学びの成果をどう還元し、どのように実践していくかについて、研修員自身とそのアクションプラン（行動計画）を発表しました。このプレゼンテーションでの発表内容は、研修員が帰国後にそれぞれの教育現場での課題解決のために活用し、各国のへき地教育の振興の一助となることが期待されます。

※SDGs・・・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）

2015 年 9 月、ニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」において、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（2030 アジェンダ）」が採択され、「誰一人取り残さない—No one will be left behind」を理念として、国際社会が 2030 年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針として、17 の目標として設定されたもの。



教育学部附属小学校 複式学級視察



四万十町立七里小学校 児童との交流



複式指導案作成演習



はりまや橋にて集合写真



閉講式にて

③JICA 課題別研修「島嶼国総合防災行政 (B)」コースを実施

日時：平成 30 年 11 月 11 日（日）～12 月 16 日（日）

概要：独立行政法人国際協力機構より JICA 課題別研修「島嶼国総合防災行政」を受託し、本学朝倉キャンパス等で実施しました。

本研修コースは、政府開発援助（ODA）事業の一環で、自然災害による被害の多い島嶼国における防災対策に焦点を当て、様々な防災手法を講義や視察を通して学び、自国の抱える課題に対する解決方法を見出すことを目的としています。

今回の研修では、開発途上国の防災担当行政官など 12 ヶ国から 14 名が参加し、兵庫県、沖縄県、高知県において、国、自治体、自主防災組織などの防災の取組みについて学びました。

兵庫県では阪神・淡路大震災の経験を活かした防災活動・福祉活動のコミュニティ形成の取組みについて学び、沖縄県では、離島ならではの防災対策や主要産業を守るための体制等について講義を受けた後、自然災害から守る防風林や防風柵、農業用ダム等の視察をしました。さらに、離島への玄関口であるフェリーターミナルにて行われた避難訓練に参加し、訓練後には石垣市職員との意見交換会を行いました。

高知県では、将来予測される南海トラフ地震・津波への備えについて、県、市町村、気象台の担当者より講義を受け、また、高知市や室戸市では地域住民による自主防災の取組に参加し、「自助・共助」の防災を体感しました。

研修最終日には、本研修での学びの成果をどう還元し、どのように実践していくかにつ

いて、研修員自身がそれぞれのアクションプラン（行動計画）を発表しました。研修員の帰国後には早くも、「帰国後すぐにアクションプランの発表を行い、自国での実施が承認され準備を始めている」との嬉しい報告も入っています。



石垣市避難訓練



日下川水害対策視察



室戸市炊き出し訓練



研修終了後懇談会にて

④JICA 青年研修「 Bangladesh/防災」コースを実施

日時：平成31年2月26日（火）～3月8日（金）

概要：独立行政法人国際協力機構より JICA 青年研修検収「 Bangladesh/防災」を受託し、本学朝倉キャンパス等で実施しました。

本研修コースは、政府開発援助（ODA）事業の一環で、世界有数の災害発生国である Bangladesh における防災対策に焦点を当て、様々な防災手法を講義や視察を通して学び、自国の抱える課題に対する解決方法を見出すことを目的としています。

今回の研修では、35歳以下の若手行政官など13名が参加し、国、自治体、自主防災組織などの防災の取組みについて学びました。

研修では、本学教員や行政職員による自治体との自主防災組織の連携等についての講義および大規模津波を想定した港湾の多重防御対策や津波避難タワーなどインフラ対策の視察等により、防災対策の必要性について理解を深めてもらうことができました。

研修の最後には、研修からの学びを応用して自国の防災対策を改善するためのアクションプランを作成し、発表会では多岐にわたる提案がなされました。



高知新港乗船視察



小学生との防災学習



アクションプラン作成



閉講式

3-2 留学生交流

(1) 留学生交流事業

①カルチャーカフェ

第26回カルチャーカフェ

日時：平成30年4月18日（水）16:30～18:00

概要：第26回カルチャーカフェは「中国」をテーマに、留学生8名、日本人学生13名、教職員2名、一般の方2名の合計25名が参加しました。

今回は総合人間自然科学研究科理学専攻所属で中国出身の留学生 陳瀛州さんがプレゼンターとなって「中国茶」をメインテーマに、お茶の文化や作法、種類、効能について説明しました。

次に、中国茶専用の茶器を使用したお茶の入れ方を学んだ後、実際に参加者がそれに倣ってお茶を入れ、飲み方の作法も教わりながら中国茶を味わいました。

「自分の国ではお茶を飲む機会があまりなく、本格的な茶道具でのデモンストレーションはとても印象深かった」「日本と中国ではお茶の入れ方や飲み方が違うことを認識した」等の感想が寄せられました。



<プレゼンテーションの様子>



<中国茶道のデモンストレーション>



<中国茶道体験の様子>



<飲み方のレクチャーを受ける参加者>

第27回カルチャーカフェ

日時：平成30年5月16日（水）16:30～18:00

概要：「デンマーク」をテーマに、留学生 10 名、日本人学生 17 名、教職員 3 名、高校生 3 名、一般の方 3 名の合計 36 名が参加しました。

今回は教育学部所属でデンマーク出身の留学生 3 名がプレゼンターとなって「Hygge（ヒュッゲ）」をメインテーマに説明がありました。ヒュッゲとは、キャンドルや焚火を囲んでコーヒーや料理を楽しみながら、居心地の良い空間を大切な家族や友人と楽しむひと時の事を意味する言葉だそうです。会場の照明を落としスクリーンに映像を投影することでヒュッゲの雰囲気再現し、参加者には Danish Rye Bread（ライ麦パン）の上にクリームチーズとサーモンやジャムをのせたオープンサンドウィッチが振る舞われ、たき火の音を BGM に、有名なデンマーク出身の童話作家アンデルセンの「The emperor's New Clothes（裸の王様）」の朗読を聞いて、本場のヒュッゲを疑似体験しました。

最後の質疑応答では、スウェーデン留学生からの「世界で一番幸せな国といわれる理由は何か」という質問に対して、「デンマークは税金が高額だが、その分医療費や大学院までの教育費が無料で、生活面で精神的なストレスがないから」という回答に、参加者からは驚きの声が上がっていました。



＜カルチャーカフェオープニング＞

＜プレゼンテーションの様子＞



＜Hygge を疑似体験＞

＜ライ麦パンのオープンサンドウィッチ＞

第28回カルチャーカフェ

日時：平成30年6月20日（水）16:30～18:00

概要：第28回カルチャーカフェ「ブルキナファソ編」が開催され、留学生8名、日本人学生13名、一般の方6名の合計27名が参加しました。

今回は総合人間自然科学研究科農学専攻所属でブルキナファソ出身の留学生がプレゼンターとなり、ブルキナファソの歴史や文化について説明しました。それらの説明の後、バオバブの実、牛乳、砂糖を入れた「バオバブジュース」と、おやつや朝食に出される豆粉を使った「サムサ」と言うドーナツのような揚げパンを試食しました。

最後の質疑応答では、モラ語・ジュラ語・フラ語等の現地語に加え、第二外国語でフランス語が使用されるなど、ブルキナファソでは色々な言語が使用されているためか、家族と話す時の言語、公共の場での言語表記、英語の勉強方法など、言語についての質問が多く寄せられました。



第29回カルチャーカフェ

日時：平成30年7月18日（水）16:30～18:00

概要：第29回カルチャーカフェ「ベルギー編」が開催され、留学生16名、日本人学生8名、一般の方6名の合計30名が参加しました。

今回はベルギー出身で高知県立大学文化学部教授のジョエル・ヨース氏に「Complex Society and Culture (複雑な社会と文化)」をメインテーマにプレゼンテーションをして頂きました。九州より面積の小さいベルギーでは、主に3つの言語が公用語として使用されています。南部のワロン地域ではフランス語（一部地域ではドイツ語）。北部のフランデレン地域ではオランダ語。首都ブリュッセルはフランデレン地域にありながらフランス語を使用するなど、主にベルギーで使用されている言語について説明がありました。参加した日本人学生からは「日本語の一言語しか話さない我々にはとても興味深かった」などの感想が寄せられました。



第30回カルチャーカフェ

日時：平成30年11月21日（水）16:30～18:00

概要：第30回カルチャーカフェ「ガーナ編」が開催され、留学生19名、日本人学生17名、教職員1名、一般の方9名の合計46名が参加しました。

今回は総合人間自然科学研究科農学専攻所属でガーナ出身の留学生 Gabriel Mawuko Ahiable さんがプレゼンターとなって、ガーナの歴史、文化、教育、政治・経済などについて紹介しました。

ガーナでは、およそ250の言語が話されており、当該プレゼンターのファーストネームは、他の現地語を話す国民には発音が難しく、似た発音の単語では意味も違って来る為、他の地域の高校に進学した際に洗礼名のみドルネームをファーストネームに変更したそうです。

また今回、ガーナでもよく飲まれているMILO（ミロ）が振る舞われ、本場のガーナチョコレートと日本で販売しているロッテガーナチョコレートの食べ比べもしました。日本のガーナチョコレートと比較すると、甘くなく、手にずっと持っても全く溶けない本場のチョコレートに参加者は驚いていました。



第31回カルチャーカフェ

日時：平成30年12月9日（水）16:30～18:00

概要：第31回カルチャーカフェ「オーストラリア編」が開催され、留学生19名、日本人学生6名、教職員1名、高校生4名、一般の方6名の合計36名が参加しました。

今回は本学人文社会科学部のショーン・バーゴイン講師に「Songs & Stories from Australia」をメインテーマに、5曲弾き語りをして頂きました。参加者は、各曲のテーマからオーストラリアの歴史やオーストラリアのクリスマスについて説明を受け、そのあと歌の詩を見ながらショーン先生の弾き語りに耳を傾けました。

また、第一次世界大戦における功績から英雄視されているオーストラリア・ニュージーランド連合軍 Australian and New Zealand Army Corps の略名「ANZAC」という名前を冠したオーストラリアで最もポピュラーなビスケットや、日本では珍しい殻付きのマカダミアナッツを試食しました。



第32回カルチャーカフェ

日時：平成31年1月23日（水）16:30～18:00

概要：第32回カルチャーカフェ「日本編」が開催され、留学生18名、日本人学生2名、教職員1名、一般の方9名の合計30名が参加しました。

今回は本学医学部のダニエル・リブル講師に「The Shakuhachi; Zen and Now」をテーマに、高知県産のお茶とお茶菓子を試食しながら、日本の伝統音楽に関するクイズを参加者と楽しみ、尺八の歴史や禅宗との関わり、海外での尺八を通じた国際交流などについてお話いただきました。

また、尺八の試し吹きに参加者がチャレンジしました。最初のひと吹きこそ上手く音が出たものの、やはり連続しては難しく音が出ませんでした。会場からは暖かい拍手が送られました。アメリカで作られたギターと日本の伝統楽器の尺八とのコラボ演奏では、その調和の取れた音色に参加者は聞き入りました。



②本学留学生による北川村日本遺産モニターツアー

日時：平成30年6月23日（土）

概要：北川村で外国人観光客を想定した日本遺産のモニターツアーを兼ねた体験学習が国際連携推進センターと日本遺産協会との共催で行われ、本学の留学生26名（中国15名、韓国6名、台湾4名、スウェーデン1名）と日本人学生4名が参加しました。

今回の活動は、留学生というリソースを地域の振興等に役立てることに主眼を置き、体験的な教育活動を通して高知の文化を学ぶとともに、留学生の目線から地域の資源を見つめ、地域の活性化に寄与することを目的として行われました。

体験学習のコースは、まず北川村モネの庭を庭師の川上さんの案内で見学し、その後、北川村小島にてゆず酢を混ぜたご飯に地元の野菜をのせた郷土料理の田舎寿司作りを体験し試食した後、日本遺産である森林鉄道跡の小島橋や実生のゆず林、中岡慎太郎の顕彰碑等を北川村在住の山田さんのガイドで散策しました。また、地元住民の方々に対してグループに分かれてインタビュー活動を行い、北川村の魅力や人口減少による地域社会の問題点等を聞き出し、地域におけるインバウンド観光の推進や地域活性化に関して考える機会となりました。学生は普段なかなか接する機会がない地元の方々の話を真剣に耳を傾け、積極的に質問を試み、活発な意見交換が行われました。

参加した学生からは、「北川村は想定していたよりも高齢化が進んでいるが、これを解決しようと頑張っている人生の大先輩である北川村の地元の方に直接お話をうかがい大変興味深く感動した」、「『モネ』という名前を使うことを許可してもらった世界に2カ所しかないモネの庭では、クロード・モネの世界観が感じられ、まるでモネの絵画の中にいるようだった。庭師の川上さんが自分の仕事を心から愛していることが感じられた」、「田舎寿司はおいしいうえに体にも良く、皆で一緒に作って食べられた点がとても良かった。寿司を作ったのは初めてだったが、1個作るためにこれほど色々な準備が必要だとは思ってもみなかった。食べ物に対するありがたさを再確認した」、「地域の方の小島の伝統を守ろうとする思いが、日本遺産の登録につながったのだと思うと、これからも語り継がなければならないと感じた」等の感想が寄せられました。本活動を通して北川村の魅力を感じるとともに、学生の立場からいかに地域の一員として自身が貢献できるかを考えるきっかけになったことと思われます。



庭師の川上さんのガイドでモネの庭見学



田舎寿司作り体験・試食



グループ別インタビュー活動



山田さんのガイドで日本遺産小島橋等散策

③2018 年度外国人留学生課外研修を実施

日時：平成30年11月10日（土）

概要：2018 年度新たに入学した外国人留学生を対象に高知県の四万十町にある海洋堂ホビー館の見学、黒潮町佐賀漁民研修センターにてカツオの薫焼きたたき作り体験、そして黒潮町佐賀地区津波避難タワー見学、久礼大正市場見学というスケジュールで課外研修を実施しました。この研修は外国人留学生が日本及び地域の歴史・文化を学び理解を深めるとともに、留学生間の親睦・交流を図ることを目的としており、留学生 52 名が参加しました。

最初に四万十町にある海洋堂ホビー館を訪れて、多くのフィギュアやプラモデルを目にしました。海洋堂ホビー館は、世界的なフィギュアメーカーとして知られる海洋堂の歴史とコレクションを展示するミュージアムであり、全国から多くのフィギュアファンが集まる聖地として知られています。日本のアニメや漫画に惹かれ、日本語の世界に飛び込んだ留学生も多く、展示されているフィギュアのリアルさ、精巧さに心を打たれた様子うかがえました。

黒潮町では、黒潮町役場の尾崎課長並びに高知県漁業協同組合佐賀統括支所女性部の皆様のご協力により、カツオのたたき作りを体験しました。留学生は女性部の方々から手ほどきを受けながら、カツオを捌く、薫で焼く、切る、たたく、お皿へ盛り付けるという過程に挑戦し、自分たちが作ったカツオのたたきと漁師飯（たたきのお茶漬け）を昼食と一緒に試食しました。昼食は女性部の方々が用意してくださった地元で採れた野菜のかき揚げ、高知野菜のイタドリと大根等の酢のもの、カツオのあら汁等をいただきました。カツオのたたき作り体験を通して、高知の食文化に対する理解も深まったのではないかと思います。

昼食後は黒潮町役場情報防災課のご協力により黒潮町佐賀地区に建設されている日本一高い津波避難タワーを見学しました。一同は高さ 25 メートルもあるタワーに登り、普段入ることができない備蓄倉庫と緊急救助スペースも見学しました。タワーは周辺の山々に負けないくらいの高さがあり、絶大的な存在感が感じられました。

帰り道、久礼大正市場に寄り、鰹漁とともに発展した漁師町、漁港、神社等が形成された独特の文化的景観を体感しました。

参加した留学生からは「初めて、こんなに沢山のフィギュアがある場所に行きました。とても新鮮でした。また、多くのフィギュア作家を知りました」、「高知名産のカツオの切り方や調理の仕方を学ぶ機会を得られてよかった。地元文化を理解するいい経験になっ

た、「6億円をかけて建築された避難タワーですが、様々な状況を想定して建てられていることを学びました。避難タワーを利用する対象者(保育園の園児等)を考慮した上での避難タワーの位置設定や津波が来る時間など基本的な事を学びました。それから、この避難タワーに対して、地域の人々は『いつか津波がくる』ではなく、『津波がきても安心できる』と考えているそうです。その積極的な考え方に感動しました」、「久礼大正市場に行って、地元の方がどんな生活をしているのか、感じられました」等の声が寄せられ、日本文化・高知文化を満喫した大変有意義な課外研修となりました。



カツオ捌き



カツオの蕁焼き



海洋堂ホビー館



久礼大正市場



佐賀地区津波避難タワー

④第3回高知大学学長杯留学生による日本語スピーチコンテスト開催

日時：平成30年12月5日(水) 16:00~18:00

概要：高知大学朝倉キャンパスメディアの森6階メディアホールにて第3回高知大学学長杯留学生による日本語スピーチコンテストが行われました。中国6名、インドネシア・韓国・ブルキナファソ・モンゴルから各1名の計10名の本学で学ぶ留学生が「自分の国再発見(日本留学で気付いた自分の国)」または「私の夢」というテーマの下、発表しました。会場には、学内外からおおよそ100名の観衆が集まり、櫻井学長を始め、地域の国際交流団体や学生団体、会場の参加者も審査に加わり、厳粛な中にもどこか和やかな雰囲気で行進

していきました。

発表者は、日本と比較する中で発見した自国もしくは自分の夢に関して真摯に向き合い、内容の構成を考えながら身振り手振りを交えて堂々とした発表を繰り広げました。観衆はそれぞれの発表者の個性あふれるスピーチに魅了され、大きな拍手を送っていました。

最優秀賞には、「匠の心」と題して、自国も日本の職人気質を学ぶべきだと語った中国からの留学生である教育学部4年生の王広燕さんが選ばれ、櫻井学長から賞状とトロフィー、記念品が手渡されました。王広燕さんは、2年前の2年生の時にも第1回のスピーチコンテストに出場し、「審査員特別賞」を受賞しましたが、今回は見事最優秀賞に輝きました。そして、「2回目の参加で非常にプレッシャーを感じましたが、もう一度自分を鍛えるため出場しました。大勢の人前でしゃべると誰でも緊張しますが、それを乗り越えることで、自分自身も成長していくと信じています。スピーチコンテストに参加することで自分にとって『経験貯金』ができ良かったと実感しました」と感想を述べてくれました。優秀賞には、ブルキナファソからの留学生である農学専攻2年生のネットヌ・サムバさんが選ばれました。サムバさんは「子どもたちが健康に育つために」というタイトルで、帰国後は高知大学で研究した内容を自国の子どもたちのため、国のために活かしたいという熱い想いを語ってくれました。審査員特別賞は、中国からの交換留学生の孟莉さんが受賞し、将来日本語の通訳になるという幼い頃からの切実な夢を「日本語通訳として外交部に入ること」という題目で決意表明してくれました。

発表者のスピーチを食い入るように聞いていた参加者からは、「留学生の夢や思いなどを聞くことが出来て良かったし、考えさせられ、触発された」、「留学生から見た日本の評価や、他国について知ることができた」、「発表者一人一人が独特なテーマをめぐり素晴らしいスピーチを発表し、聞き手として私も良い経験になった。卒業するまでに先輩のような皆に認めてもらえる良いスピーチができるよう頑張りたい」、「発表者は表情も、発音も、発表のスピードも良く、自信を持った笑顔から多くの準備をしたことが感じられた。また、留学生の目線からの大きな夢に感動した。彼らの発表から自分に欠けている点を学んだので今後は頑張りたい」、「発表者はテーマが明確で、自分の立場をはっきりと述べていた。彼らが一生懸命に夢を追求する精神に大いに励まされた。印象深いスピーチを聞き、今後もっと日本語を努力して勉強していこうと決意を新たにしたい」などの感想が寄せられました。

以上のように、今回のスピーチコンテストに参加した発表者からも観衆からもこのスピーチコンテストを通じて、さまざまな気付きがあり貴重な経験となったという声が聞かれました。



最優秀賞を受賞した王広燕さん



優秀賞を受賞したネットヌ・サムバさん



スピーチコンテスト出場者



受賞後の留学生と審査員

⑤International BONENKAI 開催

日時：平成30年12月5日（水）

概要：留学生の交流を目的に International BONENKAI を開催し、留学生 68 名、日本人学生 12 名のほか日頃留学生がお世話になっている地域の方々や教職員など約 100 名が参加しました。

KUIM2018 (Kochi University International Months 2018) の事業の一つとして留学生が参加した「第 58 回室戸貫歩」において朝倉キャンパスから室戸岬までの 88km を貫歩した留学生 3 名の表彰や、アメリカ人留学生によるバイオリンの演奏、中国人留学生による日本語と中国語による歌唱、インドネシア人留学生による歌と伝統的なダンスなど、学生の特技が披露され、普段見ることのできない個性溢れるパフォーマンスに全員が魅了されました。また、BONENKAI の最後には学長によるキーボード生演奏に合わせて参加者全員で学歌斉唱を行い、会場は一体感に包まれました。当日の記念として大学学歌の歌詞カードを大切に持ち帰る留学生もいるなど、興奮冷めやらぬ盛会となりました。



歓談の様子



室戸貫歩の表彰



日本語・中国語
での歌唱



インドネシアの伝統ダンス



バイオリン演奏



学長のキーボード演奏による学歌斉唱

(2) 地域交流事業

① 県立高知追手前高等学校にて留学生による「異文化理解講座」

日時：平成30年6月8日（金）13:50～15:10

概要：高知県立高知追手前高等学校の3年生対象の授業として、「異文化理解講座」が開催され、本学の留学生9名が講師として参加しました。

講座は、8グループの教室において、インドネシア、ベトナム、マレーシア、中国、韓国、台湾、モンゴル、スウェーデンの8カ国・地域の各留学生が、(1)なぜ日本、高知を留学先に選んだのか、(2)母国の代表的な衣食住の文化（人々の生活様式やその背景にあるものの見方）、(3)母国の課題（経済、教育、社会政策等）について、母国を離れて考えたこと、あるいは考え始めたことを高校生に投げかけ一緒に考えてもらうという内容で行われました。

高校生たちは、普段接する機会が少ない留学生の母国特有の文化や生活の話に真剣に耳を傾けていました。また、留学生からの講義を受けた後、積極的に質問を試み活発な意見交換が行われました。本講座の目的である様々な国や地域の現状を理解し、地域社会に生きる一人の市民として、これからの社会のあり方や自分にできること等について考えるきっかけになったのではないのでしょうか。



②夏休みこども教室（高知市立はりまや橋小学校）

日時：平成30年7月25日（水）8:30～12:30

（打ち合わせ：平成30年7月24日（火）13:30～16:30）

概要：ALT（Assistant Language Teacher）や留学生がキャプテンとなり、高知市内の児童65名とグループを作り、ゲームやアクティビティを行いました。本学よりスウェーデンからの留学生1名とベトナムからの留学生1名が参加しました。

③朝倉地区区民運動会

日時：平成30年10月14日（日）

概要：高知大学朝倉キャンパス近隣にある高知市立朝倉小学校グラウンドにて開催された「朝倉地区区民運動会」に本学留学生24名（出身国・地域：アメリカ、インドネシア、中国、韓国、台湾）が参加し、スポーツを通して地域住民との交流を図りました。

参加した留学生からは「(出身国にも) スポーツイベントはあるがいろんな世代の参加者がいる運動会はなく、今日は幅広い方と交流できて楽しかった」などの感想が寄せられた他、地域住民からは「留学生の日本語が上手で驚いた。今後もぜひ留学生と交流していきたいので地域の行事に参加してほしい」などの要望もあり、今後の継続した参加が期待されます。



④「日本の伝統の暮らし体験」（大豊町）

日時：（前期）平成30年6月23日（土）

（後期）平成30年11月17日（土）

概要：大豊町の家庭に1泊2日の日程で宿泊し、食事の準備や宿泊する家庭での家業のお手伝いなどを通じ、山の暮らしを体験しました。前期は1グループ3名、後期は7グループ25名の計28名が参加しました。

前期

| | |
|------|-----------|
| 参加日 | 6月23日～24日 |
| 参加人数 | 3名 |
| 国籍 | デンマーク3 |

後期

| | |
|------|------------------------------------|
| 参加日 | 11月17日～18日 |
| 参加人数 | 25名 |
| 国籍 | アメリカ1、スウェーデン2、中国13、台湾4、インドネシア3、韓国2 |

⑤高知南高等学校国際科インターナショナルデイ

日時：平成30年12月19日（水）12:40～16:00

概要：国際科に在籍する1年生から3年生までの生徒約100名を対象とした英語圏以外の文化を学ぶワークショップが、高知南高等学校のインターナショナルデイにて開催されました。本学より台湾からの留学生1名と中国からの留学生1名が講師として参加し、クイズやゲーム等を交えながらそれぞれの出身国の文化を紹介しました。



⑥朝倉小校区青少年育成協議会主催料理教室「中国料理に挑戦」

日時：平成31年2月9日（土）

概要：朝倉小校区青少年育成協議会主催による朝倉中学校の生徒を対象にした料理教室が、朝倉ふれあいセンターにて開催され、本学の留学生が講師として参加しました。今回のテーマは「中国料理に挑戦！」で、本学の中国からの留学生、王広燕さんが、「トマトと卵の中華炒め」、「エビとブロッコリーの簡単コク旨炒め」、「豚軟骨煮込み」、「鱈&豆腐スープ」の作り方を指導しました。朝倉中学校の生徒たちは、料理の作り方の説明に熱心に耳を傾け、レシピを見て質問しながら一品ずつチャレンジしました。料理はなかなかの出来栄で、一汁三菜+黒米ライスを参加者一同で味わいました。中学生からは「レシピを見ながら早速、家でも作りたい」との感想が寄せられました。

今回は料理作りのほか、カルチャーレクチャーの時間も設けられ、試食後、中国を紹介する動画を見ながら中国の概況についての紹介や簡単な中国語のレクチャーを受けました。生徒たちは早速習ったばかりの中国語で互いに挨拶を交わしました。

当日は中学校の生徒たちだけでなく、朝倉中学校の先生及び青少年育成協議会のメンバーも参加され、食を通じて国際交流、異文化理解を図ることができました。



(3) 留学生支援

① 新入留学生オリエンテーション

日時：(第1学期) 平成30年4月9日(月)、4月10日(火)

(第2学期) 平成30年9月25日(火)、9月26日(水)

概要：新入留学生オリエンテーションを4月9日と4月10日(第1学期)、9月25日と9月26日(第2学期)に開催しました。各回の内容は下表のとおりです。また、オリエンテーションに合わせてウェルカムパーティーを開催し、新入留学生と在来留学生、日本人学生が情報交換するなど懇親を深めました。

| 平成30年度第1学期 | 平成30年度第2学期 |
|--|--|
| 第1回(平成30年4月9日) ○国際連携推進センタースタッフ紹介 ○留学生生活についての諸注意 ○学生教育研究災害傷害保険の加入 ○えんむすび隊の紹介 ○高知大学生生活協同組合からの案内 ○銀行口座開設手続き※希望者のみ | 第1回(平成30年9月25日) ○国際連携推進センタースタッフ紹介 ○留学生生活についての諸注意 ○学生教育研究災害傷害保険の加入 ○高知大学生生活協同組合からの案内 ○えんむすび隊の紹介 ○銀行口座開設手続き※希望者のみ |
| 第2回(平成30年4月10日) ○情報セキュリティ講習 ○保健管理センターからのお知らせ ○学生総合支援センターからのお知らせ ○防犯・交通マナー教室：高知南警察署 ○防災講演：高知大学防災すけっと隊 ○学生グループ「国際茶屋」の紹介 | 第2回(平成30年9月26日) ○情報セキュリティ講習 ○保健管理センターからのお知らせ ○学生総合支援センターからのお知らせ ○防犯・交通マナー教室：高知南警察署 ○防災講演：高知大学防災すけっと隊 ○学生グループ「国際茶屋」の紹介 |



②帰国準備説明会

日時：(第1学期)平成30年7月11日(水)

(第2学期)平成31年1月16日(水)

概要：平成27年度第2学期より、留学期間を終えて帰国する交換留学生を対象とした帰国準備説明会を開催しています。平成30年度は、平成30年7月11日と、平成31年1月16日に実施しました。

国際交流室担当職員から、学内手続き関係(帰国日時の連絡、帰国後の連絡先、貸出物の返却など)、市役所での手続き(住民票転出届及び国民健康保険証の有効期限変更)、銀行等での手続き(銀行(郵便局)口座の解約)、住居の手続き(宿舍等退去手続き、部屋の点検、家賃支払い、電気・ガス・水道代・インターネットの解約と支払い、部屋の片づけ、ゴミの分別・処分)、携帯電話の解約、在留カードの返還など、帰国前に留意しておいてほしいことについて、丁寧に説明を行いました。また、今後の留学生支援に活かすため、修学や生活上の良かったことや困ったことなどについてアンケートを実施しました。

最後に国際交流室から、留学終了後も帰国留学生ネットワークの活動やホームページ、Facebookなどを通じて、高知大学とのつながりを継続してほしいと伝えました。

(4) 短期プログラム受入事業

①協定校向け英語によるサマーコース

日時：平成30年7月2日（月）～7月11日（水）

概要：国際連携推進センターでは、短期の高知滞在を通じて高知の良さや高知大学の留学生生活を体験してもらうことを目的として、7月2日から11日までサマーコース「日本文化コース」を実施しました。イェーテボリ大学（スウェーデン）、インランドノルウェー応用科学大学（ノルウェー）、ユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲン（デンマーク）から合計6名の学生が参加し、日本の文化や歴史、自然について学ぶと共に、本学学生や土佐さきがけプログラムが同時期に実施しているロードアイランド大学（アメリカ）の学生対象サマーコースの参加学生との交流を図りました。

参加学生は、まず大学の講義に参加し、本学学生から日本の概要を学びました。その後、高知城及び歴史博物館、牧野植物園等を訪れ専門家の解説を受けたほか、よさこい踊りや座禅、土佐和紙漉き、書道などを体験し、日本文化や地域の歴史、伝統について理解を深めました。研修最終日には義務教育学校土佐山学舎を訪問し、地域と連携した地域課題解決への取り組みや、中山間地域における学校運営について学ぶと共に、授業やクラブ活動にも参加し、生徒たちとの交流を楽しみました。

残念ながらコース期間中の大雨で幾つかのプログラムが中止となってしまいましたが、参加学生からは「書道を通じて日本の文化を多く学んだ」「知らない人々と出会い、そして新しいことが体験できて充実していた」「来年予定している短期留学で、また高知大学に来たいと思うようになった」などの感想が寄せられ、一様に満足した表情を見せていました。

また、本学日本人学生からは「参加学生の国の話を聞き、興味を持つようになった」「もっと英語を勉強してコミュニケーションが取れるようになれば、その分もっと世界も広がると感じた」といった声が聞かれました。本コースは参加学生だけではなく、本学学生にとっても国際交流や異文化理解への関心を高める機会となりました。



大学の授業で日本の文化について話し合う



よさこいを踊る参加学生



書道体験



土佐山学舎の生徒と交流

(5) 海外派遣留学支援

海外留学説明会（企画・実施：高知大学研究国際部国際交流室）

| 第1回海外留学説明会 | | |
|------------|--|----------------|
| 開催日 | 平成30年4月25日 | |
| 会場 | メディアホール（メディアの森） | |
| 参加者数 | 71名 | |
| プログラム | 1. 開会挨拶 2. 「キャリア」×「留学」セミナー 3. 海外留学の基本情報・準備の話 4. 海外インターンシップ報告 5. 留学推進団体「LINK 高知大学」の紹介 | |
| 第2回海外留学説明会 | | |
| 開催日 | 平成30年7月18日 | |
| 会場 | 共通教育等211番教室 | |
| 参加者数 | 26名 | |
| プログラム | 海外渡航危機管理セミナー 1. 講義：国別危険情報・注意すべきポイントの提供と海外旅行保険の役割 | |
| 第3回海外留学説明会 | | |
| 開催日 | 平成30年11月21日 | |
| 会場 | 共通教育棟125番教室、127番教室 | |
| 参加者数 | 15名 | 3名 |
| プログラム | 1. 海外留学の基本情報・準備の話 2. 春休み語学研修「STUDY English in Asia」紹介 3. 交換留学経験者によるパネルトーク ※留学資料閲覧コーナー・留学個別相談ブース開設 | 海外大学院進学のための説明会 |
| 第4回海外留学説明会 | | |
| 開催日 | 平成30年12月5日 | |
| 会場 | 共通教育棟323番教室 | |
| 参加者数 | 32名 | |
| プログラム | 【教職員対象】 海外渡航危機管理セミナー 1. 講義：国別危険情報・注意すべきポイントの提供と海外旅行保険の役割 | |
| 第5回海外留学説明会 | | |
| 開催日 | 平成30年12月5日 | |
| 会場 | 共通教育棟324番教室 | |
| 参加者数 | 20名 | |
| プログラム | 【学生対象】 海外渡航危機管理セミナー 1. 講義：国別危険情報・注意すべきポイントの提供と海外旅行保険の役割 | |

(6) 国際交流基金助成事業

①平成 29 年度高知大学国際交流基金助成事業報告会及び平成 30 年度第 1 回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式を実施

日時：平成30年7月18日（水）

概要：高知大学で学ぶ外国人留学生や、高知大学から海外の大学へ留学する学生、また海外で学会発表を行う学生を対象に奨学金を支給する「高知大学国際交流基金助成事業」の平成 30 年度第 1 回助成決定通知書交付式及び、前年度の採択者による成果報告会を行いました。

交付式では、櫻井学長より各採択者に通知書が手渡され、それぞれが留学にかける思いを新たにしていました。

続いて前年度採択者による報告会が行われ、韓国人留学生による高知大学での留学の成果や、日本人学生によるアメリカの大学での交換留学体験について発表があり、奨学金を受給したことによる御礼と成果が述べられました。



助成決定通知書交付の様子



H30 年度交付式集合写真



韓国人留学生による成果発表



日本人学生による交換留学成果発表

②平成30年度第2回高知大学国際交流基金助成事業助成決定通知書交付式を実施

日時：平成30年10月10日（水）

概要：「高知大学国際交流基金助成事業」の「外国人留学生への奨学事業 新戦略型」に採択された大学院生 1 名を対象に、助成決定通知書交付式を行いました。

この「新戦略型」は、文部科学省の「平成 25 年度国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択された本学のプログラムに入学する私費外国人留学生を対象としています。本学は大学院博士課程である黒潮圏総合科学専攻が実施する「黒潮圏の持続型

社会形成を目指す人材育成プログラム」が採択されており、同専攻の学生に対して、入学から学位取得までの期間を支援する奨学金で、戦略的に優秀な留学生の応募促進とその獲得を行うことで、卒業後も本学との懸け橋となる人材の育成を目指すものです。

交付式では、櫻井学長より採択者に助成決定通知書が手渡され、採択者からは、奨学金を受給することへの御礼と本学での留学の抱負が述べられました。



交付決定通知書交付の様子



採択者を囲んで記念写真

③高知大学国際交流基金助成決定通知書交付式を挙

日時：平成30年12月5日（水）

概要：高知大学で学ぶ外国人留学生及び高知大学から海外へ留学する学生を支援する「高知大学国際交流基金助成事業」において、「外国人留学生への奨学事業」、「外国へ留学する学生への奨学事業」、及び「大学院生の研究発表を目的とする海外派遣事業」に採択された8名を対象に、学長、関係理事、指導教員の出席のもと、助成決定通知書交付式を行いました。

櫻井学長からは、自身の留学経験を基に「安全管理に気を付けて充実した留学生活を送ってほしい」との激励の言葉が述べられ、採択者に助成決定通知書が手渡されました。また採択者代表からは、奨学金を受給することへの御礼と、留学への抱負が述べられました。



採択者代表挨拶



学長を囲んで記念撮影

4. 進学説明会

①アクセスリード 外国人のための進学説明会(大学院進学希望者向け) (東京)

日時：平成30年5月17日(木) 11:00~17:00

概要：クロスタワー24F「アクセス渋谷フォーラム」にて、国立大学4校(本学の他、群馬大学・電気通信大学)、私立大学11校(桜美林大学、大妻女子大学、関西大学、国際基督教大学、多摩大学、上智大学、中央大学、明治学院大学、東洋大学、明治大学、東京都市大学)が集まり、外国人のための進学説明会(大学院進学希望者向け)が行われました。全体では940名が来場し、それぞれの大学ブースにて個別相談が実施されました。高知大学のブースへは58名の学生が訪れ、積極的に質問を投げかけながら説明に聞き入っていました。

②アクセスリード 外国人のための進学説明会(大学院進学希望者向け) (大阪)

日時：平成30年5月22日(火) 13:00~16:00

概要：大阪富国生命ビル12F「アクセス渋谷フォーラム」にて、国立大学1校(本学)、公立大学(大阪府立大学、神戸市外国語大学)、私立大学11校(大阪産業大学、大阪女学院大学、関西学院大学、近畿大学、神戸学院大学、立命館大学)が集まり、外国人のための進学説明会(大学院進学希望者向け)が行われました。全体では362名が来場し、それぞれの大学ブースでは個別相談が実施されました。各大学のブースにて個別相談が行われる中、高知大学のブースには41名の学生が訪れ、活発な質問が飛び交いました。

③ジーベック 外国人留学生のための進学相談会(岡山)

日時：平成30年7月5日(木) 11:00~14:30

概要：岡山駅前第一セントラルビルにて、国公立大学4校(本学の他、愛媛大学、滋賀大学、県立広島大学)、私立大学10校(岡山商科大学、山陽学園大学、就実大学、大阪産業大学、神戸医療福祉大学、京都ノートルダム女子大学、天理大学、四日市大学、愛知大学、神戸山手大学)、専門学校10校が集まり、外国人留学生のための進学相談会が行われました。

各大学のブースにて留学に関する個別相談が行われ、高知大学のブースには25名の学生が訪れ、真剣に質問をし、説明に聞き入っていました。学部志望者が24名、大学院が1名で、人文社会科学部及び理工学部への進学希望者が多く見受けられました。相談者からは複数の学科を受けられるのか、といった質問もあり、本学への受験を真剣に考えている学生ばかりでした。

外国人留学生のほか、岡山外語学院教員1名、岡山ビジネスカレッジ教員1名が本学のブースに情報収集に訪問されました。

高知大学のブースに来た来場者数：25名

| | |
|-------|---|
| 留学指導者 | 2名 |
| 留学生 | 中国24名、スリランカ1名 |
| 希望学部 | 人文学部：12名、理工学部：12名、大学院1名、医学部3名、農林海洋科学部：4名、土佐さきがけ1名 |

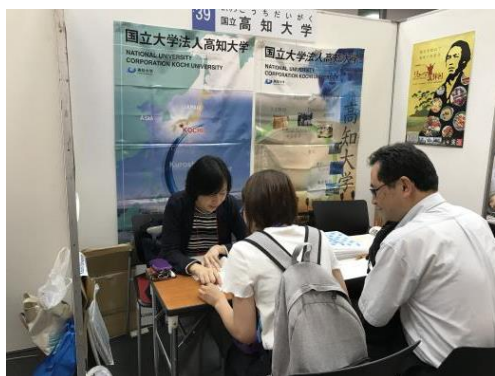
④ JASSO 外国人学生のための進学説明会（大阪）

日時：平成30年7月14日（土）10時00分～16時00分

概要：梅田スカイビル TOWER WEST 3F ステラホールにて、大学等への進学を目指している外国人留学生等を対象に、132機関が参加した独立行政法人 日本学生支援機構主催の進学説明会が行われました。当日の全体の参加人数は1,740名で、本ブースを訪れたのは、日本語学校教員数名も含めて48名でした。うち、大学院への進学希望者が15名でした。

高知大学のブースに来た来場者

| | |
|----------------|--|
| 進学指導者 | 7名 |
| 留学生 | 41名（うち学部志望26名、大学院15名） |
| 国籍 | 中国：28名 台湾：1名 ベトナム：7名 ミャンマー：1名 インドネシア：2名 ハンガリー：1名 その他：1名 |
| 希望学部 (複数回答) | 人文社会科学部：27名 理工学部：9名 医学部：3名 農林海洋科学部：7名 土佐さきがけプログラム：2名 |



高知大学のブースの様子



大阪会場の様子

5.日本語授業関係（授業時間割、シラバス等）

＜2018年度第1学期国際連携推進センター日本語総合コース授業時間割＞

| 時限 | 開講キャンパス等 | 月(MON) | 火(TUE) | 水(WED) | 木(THU) | 金(FRI) |
|--------------------|-----------|--------------|---------------------|-------------------|-------------|--------------|
| I 8:50～10:20 | 日本語集中(朝倉) | 基礎文法(神崎) | 基礎文法(石川) | 基礎文法(池) | 基礎文法(尾中) | 基礎文法(大塚) |
| | 日本語総合(朝倉) | | 中級聴解Ⅰ(尾中) | | | |
| | 日本語総合(物部) | 初級Ⅰ(今井) | | | 初級Ⅰ(神崎) | |
| | 日本語総合(岡豊) | | | | 日本語Ⅰ(林) | |
| II 10:30～12:00 | 日本語集中(朝倉) | 基礎文法(神崎) | 基礎文法(石川) | 基礎文法(池) | 基礎文法(尾中) | 基礎文法(大塚) |
| | 日本語総合(朝倉) | | | 高知文化事情(エバ) | 初中級会話Ⅰ(今井) | 中級会話Ⅰ(池) |
| | 日本語総合(物部) | 初級Ⅱ(今井) | | | 初級Ⅱ(神崎) | |
| | 日本語総合(岡豊) | | 日本語Ⅰ(林) | | | |
| III 13:10～14:40 | 日本語集中(朝倉) | 初級漢字・語彙(吉田) | 初級聴解・会話(石川) | | 初級聴解・会話(今井) | 初級作文(吉田) |
| | 日本語総合(朝倉) | 中級作文(神崎) | コミュニケーション日本語Ⅰ(大塚・林) | | | 中級漢字・語彙Ⅰ(尾中) |
| | 日本語総合(物部) | 初中級聴解・会話(東條) | | | | |
| | 日本語総合(岡豊) | | エバ | 物部(東條)13:00～15:00 | | |
| IV 14:50～16:20 | 日本語集中(朝倉) | | | | | |
| | 日本語総合(朝倉) | 初中級文型(吉田) | | | | |
| | 日本語総合(物部) | | | | | |
| | 日本語総合(岡豊) | | | 異文化理解A(林・大塚) | | |
| V 16:30～18:00 | 日本語集中(朝倉) | 神崎 | 林 | | 大塚 | エバ |
| | 日本語総合(朝倉) | | | | | |
| | 日本語総合(物部) | | | | | |
| | 日本語総合(岡豊) | | 日本語初級・日本事情(東條) | | 日本語中級(東條) | |

＜2018年度第2学期国際連携推進センター日本語総合コース授業時間割＞

| 時限 | 開講キャンパス等 | 月(MON) | 火(TUE) | 水(WED) | 木(THU) | 金(FRI) |
|--------------------|-------------|-----------|------------------|---------|-----------|-------------|
| I 8:50～10:20 | 集中コース(朝倉) | | | | | |
| | 総合コース(朝倉) | | 基礎日本語(林) | | | |
| | 総合コース(物部) | | 初級Ⅲ(神崎) | | | 日本語Ⅲ(大塚) |
| | 共通教育 | | | | | |
| II 10:30～12:00 | 集中コース(朝倉) | | | | | |
| | 総合コース(朝倉) | 中級読解(神崎) | | | 中級聴解Ⅱ(林) | 中級漢字・語彙Ⅱ(池) |
| | 総合コース(朝倉) | | 基礎日本語(林) | | 基礎日本語(大塚) | |
| | 総合コース(物部) | | 初級Ⅰ(神崎) | 初級Ⅲ(神崎) | 初級Ⅰ(伊藤) | 初級Ⅱ(石川) |
| III 13:10～14:40 | 集中コース(朝倉) | | | | | |
| | 総合コース(朝倉) | 初中級文法(吉田) | コミュニケーション日本語Ⅱ(林) | | 基礎日本語(大塚) | 中級会話Ⅱ(尾中) |
| | 総合コース(物部) | 初級Ⅱ(今井) | 日本事情(東條・今井) | | | |
| | 共通教育 | 日本語Ⅳ(神崎) | | | 日本語Ⅳ(神崎) | |
| IV 14:50～16:20 | 集中コース(朝倉) | | | | | |
| | 総合コース(朝倉) | 神崎 | エバ・林 | | 大塚・エバ | |
| | 補講(物部) | | | | | |
| | オフィスアワー(朝倉) | | | | | |
| V 16:30～18:00 | 集中コース(朝倉) | | | | | |
| | 総合コース(朝倉) | | | | | |
| | 総合コース(物部) | | | | | |
| | 総合コース(岡豊) | | 日本語初級・日本事情(東條) | | 日本語中級(東條) | |

2018年度日本語集中コース
第1学期授業シラバス<朝倉キャンパス>

I. 授業の概要

大使館推薦の文部科学省国費留学生のためのコースである。4月第3週から始まり、週14コマ（28時間）の授業が15週間行われる。授業内容は「基礎文法」と「初級漢字・語彙」、「初級聴解・会話」、「初級作文」に分かれる。全体の構成は「基礎文法」10コマ、「初級漢字・語彙」1コマ、「初級聴解・会話」2コマ、「初級作文」1コマである。

また、教科書は『かな入門』、『みんなの日本語Ⅰ』、『みんなの日本語Ⅱ』を使用し、前半の初級Ⅰは『かな入門』と『みんなの日本語Ⅰ』まで、後半の初級Ⅱは『みんなの日本語Ⅱ』を学習する。

II. 授業レベルについて

初めて日本語を学習する学習者を対象とし、日本語の基本的な「話す、聞く、書く、読む」の4技能の習得と大学院での研究及び日常生活に必要な日本語の運用能力の習得を目指す。また、日本で生活していく上で必要な日本に関する知識を習得する。本コースの到達目標は、前半の初級Ⅰは日本語能力試験 N5 レベル、後半の初級Ⅱは日本語能力試験 N4 レベルとする。

III. クラス内容

<初級Ⅰ>

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|---|-------------|
| 初級文法 | 神崎道太郎（月） 石川啓子（火） 池純子（水） 尾中美代子（木） 大塚薫（金） | 月～金曜日 1・2時限 |

授業内容：日本語学習の経験のない学習者を対象に、ひらがな・カタカナ、五十音の読み書きと、日本語の実用的な日常会話・基本表現および生活必須語彙を、場面に即して実践的に習得する。日本語能力試験 N5 レベルの会話、聴解能力を目指す。

テキスト：『日本語かな入門』

『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』

『みんなの日本語初級Ⅰ 翻訳・文法解説 英語版』

『みんなの日本語初級Ⅰ 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅰ 練習C・会話イラスト集』

『みんなの日本語初級Ⅰ 導入・練習イラスト集』

評価方法：出席点、平常点と試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|---------|-------|---------|
| 初級漢字・語彙 | 吉田鈴香 | 月曜日 3時限 |

授業内容：入門レベルの学習者を対象とし、初級レベルの漢字・語彙能力の向上を目指し、80字程度の漢字とそれに関連する語彙を、文レベルの練習を通して学習する。

テキスト：『BASIC KANJI BOOK vol.1』等
 評価方法：出席点、平常点と試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|---------|---------------------|------------|
| 初級聴解・会話 | 石川啓子(火) 今井多衣子(木) | 火・木曜日 3 時限 |

授業内容：入門レベルの学習者を対象とし、入門から初級レベルまでの総合的な日本語を学習する。日本語によるコミュニケーション能力の習得を目指す。

テキスト：『みんなの日本語初級 I 聴解タスク 25』
 『書いて覚える文型練習帳 I』
 『みんなの日本語初級 I 標準問題集』等

評価方法：出席点、平常点と試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|-------|----------|
| 初級作文 | 吉田鈴香 | 金曜日 3 時限 |

授業内容：入門レベルの学習者を対象とし、入門から初級レベルまでの総合的な日本語を学習する。日本語による読解及び作文能力の向上を目指す。

テキスト：『みんなの日本語初級 やさしい作文』
 『絵入り日本語作文入門』
 『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック 25』等

評価方法：出席点、平常点と試験

<初級Ⅱ>

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|---|--------------|
| 初級文法 | 神崎道太郎 (月) 石川啓子 (火) 池純子 (水) 尾中美代子 (木) | 月～金曜日 1・2 時限 |

授業内容：『みんなの日本語初級 I』を学習し終えた学習者を対象に、日本語の実用的な日常会話と基本表現および生活必須語彙を、場面に即して実践的に習得する。日本語能力試験 N4 レベルの会話、聴解能力を目指す。

テキスト：『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』
 『みんなの日本語初級Ⅱ 翻訳・文法解説 英語版』
 『みんなの日本語初級Ⅱ 書いて覚える文型練習帳』
 『みんなの日本語初級Ⅱ 練習 C・会話イラスト集』
 『みんなの日本語初級Ⅱ 導入・練習イラスト集』

評価方法：出席点、平常点と試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|---------|-------|----------|
| 初級漢字・語彙 | 吉田鈴香 | 月曜日 3 時限 |

授業内容：入門レベルの学習者を対象とし、初級レベルの漢字・語彙能力の向上を目指し、
150 字程度の漢字とそれに関連する語彙を、文レベルの練習を通して学習する。

テキスト：『BASIC KANJI BOOK vol.1』等

評価方法：出席点、平常点と試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|---------|---------------------|------------|
| 初級聴解・会話 | 石川啓子(火) 今井多衣子(木) | 火・木曜日 3 時限 |

授業内容：入門レベルの学習者を対象とし、入門から初級レベルまでの総合的な日本語を
学習する。日本語によるコミュニケーション能力の習得を目指す。

テキスト：『みんなの日本語初級Ⅱ 聴解タスク 25』

『書いて覚える文型練習帳Ⅱ』

『みんなの日本語初級Ⅱ 標準問題集』等

評価方法：出席点、平常点と試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|-------|----------|
| 初級作文 | 吉田鈴香 | 金曜日 3 時限 |

授業内容：入門レベルの学習者を対象とし、入門から初級レベルまでの総合的な日本語を
学習する。日本語による読解及び作文能力の向上を目指す。

テキスト：『みんなの日本語初級 やさしい作文』

『絵入り日本語作文入門』

『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるトピック 25』等

評価方法：出席点、平常点と試験

2018年度日本語総合コース
第1学期授業シラバス<朝倉キャンパス>

I. 授業の概要

高知大学朝倉キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。4月第3週から始まり、プレースメントテストを受けた受講生を対象とする。科目名は中級レベル対象の「初中級文型」、「初中級会話Ⅰ」、「中級作文」、「中級聴解Ⅰ」、「中級会話Ⅰ」、「中級漢字・語彙Ⅰ」、「高知文化事情」、中上級レベル対象の「コミュニケーション日本語Ⅰ」である。

II. 授業レベルについて

中級レベルは、初級修了レベルの学生を対象とし、中級前半から中級後半レベルへの4技能の実力向上を図る。到達目標は日本語能力試験 N2 レベルとする。

中上級レベルは、日本語能力試験 N2 レベルの学生を対象とし、上級レベルへの4技能の実力向上を図り、到達目標は日本語能力試験 N1 レベルとする。

III. クラス内容

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|-------|--------|
| 初中級文型 | 吉田鈴香 | 月曜日 4限 |

授業目標：初級レベルの文型を適切に使えるようになることを目標とする。新しい文型を身につけ、中級レベルの日本語学習に進む準備をする。初級文法を復習し、新しい文法を学習していく。短文作成に重点を置く。

テキスト：『できる日本語 わたしの文法ノート』凡人社

評価方法：出席を含む受講態度、宿題、期末試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|--------|--------|--------|
| 初中級会話Ⅰ | 今井 多衣子 | 木曜日 2限 |

授業目標：日常的な日本語表現を使い、適切な会話やスピーチができるようになることを目標とする。

テキスト：『会話の授業を楽しくするコミュニケーションのためのクラス活動 40』スリーエーネットワーク

評価方法：発表、課題・授業への積極的態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|--------|--------|
| 中級作文 | 神崎 道太郎 | 月曜日 3限 |

授業目標：さまざまな機能表現を学ぶと同時に、短文から段落作成、体験報告などの一般文章の作成、そして資料を利用したレポートの書き方へと文章構成を段階的なトレーニングで論理的な日本語が書けるようになることをめざす。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：課題・受講態度、出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|--------|--------|---------|
| 中級聴解 I | 尾中 美代子 | 火曜日 1 限 |

授業目標：日本語音声の特徴と聴解のストラテジーを学び、日常耳にする様々な音声を正しく理解できる。

テキスト：『毎日の聞きとり plus40』 凡人社
『上級の力をつける聴解ストラテジー上』 凡人社

評価方法：期末試験、課題・受講態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|--------|-------|---------|
| 中級会話 I | 池 純子 | 金曜日 2 限 |

授業目標：グループディスカッションや発表を通して、言いたいことを適切に相手に伝えるための日本語のコミュニケーション能力を育成する。

テキスト：『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』
スリーエーネットワーク
『会話の授業を楽しくするコミュニケーションのためのクラス活動 40』
スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-----------|--------|---------|
| 中級漢字・語彙 I | 尾中 美代子 | 金曜日 3 限 |

授業目標：中級レベルにふさわしい語彙力と表現能力を身につける。

テキスト：『コロケーションが身につく日本語表現練習帳』 研究社

評価方法：期末試験、受講態度、課題

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|--------|---------|---------|
| 高知文化事情 | エバ・ガルシア | 水曜日 2 限 |

授業内容：地域の伝統文化を体験しながら、自然環境や歴史的背景と文化の関係を考え、総括的に学習し、高知文化への理解を深めることを目標とする。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：課題提出・口頭発表、出席・受講態度、最終レポート

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|----------------|------------|---------|
| コミュニケーション日本語 I | 林翠芳 大塚薫 | 火曜日 3 限 |

授業目標：大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身に付け、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」などの発信型スキルを伸ばすことを目標とする。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：最終発表、課題、出席・受講態度

2018年度日本語総合コース
第1学期授業シラバス<岡豊キャンパス>

I. 授業の概要

高知大学岡豊キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。「日本語初級・日本事情」と「日本語中級」を週1コマずつ設け、2018年4月第3週から7月まで15週間開講する。

II. 授業レベルについて

「日本語初級・日本事情」は、初級レベルの学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。原則として留学生がいつ参加しても授業に主体性をもってかかわられる内容とする。

「日本語中級」は、初級修了レベルの学生を対象とし、中級レベルの4技能の実力アップを図る。到達目標は日本語能力試験 N2 レベルとする。

III. クラス内容

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------------|-------|--------|
| 日本語初級・日本事情 | 東條 美紀 | 火曜日 5限 |

授業内容：初級の日本語を使って会話を楽しむ。

使用教材：『にほんご これだけ!』2 ココ出版
 自主教材

評価方法：出席、課題、授業態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|-------|--------|
| 日本語中級 | 東條 美紀 | 木曜日 5限 |

授業内容：まとまった文章を書き、自国の紹介や文化について語るができることを目指す。日本の社会や文化を知り、比較しながら自国を日本語で紹介する。

使用教材：『日本語ドキドキ体験交流活動集』国際交流基金関西国際センター

評価方法：出席、課題、授業態度

2018年度日本語総合コース
第1学期授業シラバス<物部キャンパス>

I. 授業の概要

高知大学物部キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。4月第3週から始まり、日本語未習者を対象とする「初級Ⅰ」、日本語初級前半を学習している学習者を対象とする「初級Ⅱ」を週2コマずつ設ける。また、既習者で初中級レベルの学生を対象とした「初中級聴解・会話」を週1コマ開講する。

II. 授業レベルについて

「初級Ⅰ」は初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

「初級Ⅱ」は日本語初級前半を学習している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

「初中級聴解・会話」は、初中級修了レベルの学生を対象とし、中級から上級レベルへの聴解・会話能力の向上を図る。到達目標は日本語能力試験 N3 レベルとする。

III. クラス内容

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|----------------------|----------|
| 初級Ⅰ | 今井多衣子(月) 神崎道太郎(木) | 月・木曜日 1限 |

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
 ②動詞のフォームを使った基本的な文型
 ③生活必須語彙・表現

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊 第1課～第13課』スリーエーネットワーク
 『みんなの日本語初級Ⅰ 翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|----------------------|----------|
| 初級Ⅱ | 今井多衣子(月) 神崎道太郎(木) | 月・木曜日 2限 |

授業内容：初級前半の学習半ばの学習者に対し、継続して初級の日本語学習を行う。初級の基本的な文型、文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊 第14課～第25課』スリーエーネットワーク
 『みんなの日本語初級Ⅰ 翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|----------|-------|--------|
| 初中級聴解・会話 | 東條 美紀 | 月曜日 3限 |

授業内容：日本の社会や文化を教材に、聴解と会話を学習する。

使用教材：自主教材

評価方法：出席、課題、授業態度

2018年度日本語集中コース
第2学期授業シラバス<朝倉キャンパス>

I. 授業の概要

高知大学朝倉キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。10月第1週から始まり、プレースメントテストを受けた受講生を対象とする。日本語未習者を対象とする「基礎日本語」、日本語既習者で中級レベルの学生を対象とした「初中級文法」、「初中級会話Ⅱ」、「中級読解」、「中級聴解Ⅱ」、「中級漢字・語彙Ⅱ」、「中級会話Ⅱ」、中上級レベルの学生を対象とする「コミュニケーション日本語Ⅱ」を設ける。

II. 授業レベルについて

入門レベルは初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

中級レベルは、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの4技能の実力アップを図る。到達目標は日本語能力試験 N2 レベルとする。

中上級レベルは、日本語能力試験 N2 レベルの学生を対象とし、上級レベルへの4技能の実力アップを図り、到達目標は日本語能力試験 N1 レベルとする。

III. クラス内容

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|--------|-----------|
| 基礎日本語 | 林翠芳(火) | 火曜日 1・2 限 |
| | 大塚薫(木) | 木曜日 2・3 限 |

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第1課～第25課 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、出席、授業態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|-------|---------|
| 初中級文法 | 吉田 鈴香 | 月曜日 3 限 |

授業内容：初級レベルの文型を適切に使えるようになる。新しい文型を身につけ、中級レベルの日本語学習に進む準備をする。初級文法を復習し、新しい文法を学習していく。短文作成に重点を置く。

使用教材：『できる日本語 わたしの文法ノート 初中級』凡人社

評価方法：出席を含む受講態度、宿題、期末試験

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|--------|--------|---------|
| 初中級会話Ⅱ | 神崎 道太郎 | 木曜日 4 限 |

授業内容：日常的な日本語表現を使い、適切な会話ができるようになることを目標とする。身近な話題の中からトピックを選び、それに関連した内容で意見交換を行う。

使用教材：ハンドアウト

評価方法：課題・受講態及び出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|--------|--------|
| 中級読解 | 神崎 道太郎 | 月曜日 2限 |

授業内容：中級レベルの学習者を対象とし、文章全体の構造を考えながら分析的に読む練習を行い、読む能力と語彙力の養成を目指す。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：課題・受講態度及び出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|-------|--------|
| 中級聴解Ⅱ | 林 翠芳 | 木曜日 2限 |

授業内容：会話場面におけるリスニング能力を高め、場面に応じて適切に話す能力を付けることを目標とする。

使用教材：『聞いて覚える話し方 日本語生中継』中～上級編 くろしお出版

評価方法：期末試験(発表)、出席、課題・受講態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|----------|-------|--------|
| 中級漢字・語彙Ⅱ | 池 純子 | 金曜日 2限 |

授業内容：中級(N2程度)の漢字・語彙の習得を目指す。日常生活でよく使う漢字や語彙の定着を目的とする。漢字・語彙の小テストをしたり、学習した漢字や語彙を使った作文を宿題にしたりすることもある。

テキスト：『語彙マップで覚える漢字と語彙』Jリサーチ出版

『ペアで覚えるいろいろなことば』武蔵野書院

『新完全マスター漢字—日本語能力試験 N2』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度・出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|--------|--------|
| 中級会話Ⅱ | 尾中 美代子 | 金曜日 3限 |

授業内容：日常の様々なトピックについて、自分の考えや意見を発言できる。日常生活で目にする短い文章を取り上げ、その文に込められた意味や感情などについて、グループで意見交換をし、発表する。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：期末試験、課題・受講態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|---------------|-------|--------|
| コミュニケーション日本語Ⅱ | 林 翠芳 | 火曜日 3限 |

授業内容：大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身に付け、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」などの発信型スキルを伸ばすことを目標とする。

テキスト：『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』 The Japan Times

『大学で学ぶための日本語ライティング』 The Japan Times

評価方法：最終発表、課題提出、出席・受講態度

2018年度日本語総合コース
第2学期授業シラバス<岡豊キャンパス>

I. 授業の概要

高知大学岡豊キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。「日本語初級・日本事情」「日本語中級」を週1コマずつ設け、2018年10月第1週から2019年2月まで15週間開講する。

II. 授業レベルについて

「日本語初級・日本事情」は、初級レベルの学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。原則として留学生がいつ参加しても授業に主体性をもってかかわられる内容とする。

「日本語中級」は、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの4技能の向上を図る。到達目標は日本語能力試験N3レベルとする。

III. クラス内容

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------------|-------|--------|
| 日本語初級・日本事情 | 東條 美紀 | 火曜日 5限 |

授業内容：初級レベルの日本語を使ってコミュニケーションをとる楽しさを日本事情や相互文化理解をとおして学習する。日本事情として日本の家庭の正月を体験する。

使用教材：『みんなの日本語初級 I』スリーエーネットワーク、自主教材

評価方法：出席、課題、授業態度

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|-------|-------|--------|
| 日本語中級 | 東條 美紀 | 木曜日 5限 |

授業内容：仕事、学校、娯楽で出会うような身近な話題について主要な点を理解でき、自分の気持ち、状況、経験などをより豊かに表現できることを目指す。訪問、ことばを学ぶ楽しみ、結婚、なやみ相談、旅行中のトラブルなどを学習する。

使用教材：『まるごと 日本のことばと文化』三修社

評価方法：出席、課題、授業態度

2018年度日本語総合コース
第2学期授業シラバス<物部キャンパス>

I. 授業の概要

高知大学物部キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。10月第1週から始まり、日本語未習者を対象とする「初級Ⅰ」、日本語入門を習得した学習者を対象とする「初級Ⅱ」、日本語初級前半を習得している学習者を対象とする「初級Ⅲ」、2018年に来日した学生を対象とする「日本事情」を設ける。「初級Ⅰ」、「初級Ⅱ」、「初級Ⅲ」は週2コマ、「日本事情」は週1コマである。

II. 授業レベルについて

「初級Ⅰ」は初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

「初級Ⅱ」は日本語入門を習得している学生を、「初級Ⅲ」は日本語初級前半を習得している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N4 レベルとする。

「日本事情」は、日本の生活に慣れていない学生を対象とし、高知県での生活環境に慣れ、今後生活していく上での様々な情報を習得し、地域の人々とも円満な関係を築けるようになることを目指す。

III. クラス内容

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|---------------------|----------|
| 初級Ⅰ | 神崎道太郎(火) 伊藤里奈(木) | 火・木曜日 2限 |

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
 ②動詞のフォームを使った基本的な文型
 ③生活必須語彙・表現

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第1課～第13課 スリーエーネットワーク
 『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク
 『かな入門』

評価方法：期末試験、小テスト・受講態度、出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|---------------------|---------------|
| 初級Ⅱ | 今井多衣子(火) 石川啓子(金) | 月曜日 3限・金曜日 2限 |

授業内容：初級前半の学習半ばの学習者に対し、引き続き初級の日本語学習を行う。初級前半の基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第12課～第21課 スリーエーネットワーク
 『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|-------|-----------------|
| 初級Ⅲ | 神崎道太郎 | 火曜日 1 限・水曜日 2 限 |

授業内容：初級前半を学習した学習者に対し、引き続き初級の日本語学習を行う。初級前半から後半にかけての基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要な最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：ハンドアウト

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

| 授業科目 | 担当講師名 | 曜日・時限 |
|------|---------------|---------|
| 日本事情 | 今井多衣子 東條美紀 | 火曜日 3 限 |

授業内容：高知県及び高知市、南国市での生活環境に慣れ、印象深い日本文化体験をする。

- ① オリエンテーション、自己紹介
- ② 高知市へ行き、My-Yu バスに乗り観光地巡り
- ③ 大学一日公開日の準備
- ④ 大学一日公開日「日本語カフェ」での日本語実習
- ⑤ 南国市の「つながっタワー」アプリ講習及び災害に関する情報学習
- ⑥ 日本料理体験
- ⑦ 日本の年間伝統行事と年賀状
- ⑧ 日本の正月体験
- ⑨ 日本事情の感想と各国事情との比較

使用教材：独自教材（ハンドアウト）

評価方法：課題、受講態度、出席

6. 出版・刊行物等

(<http://www.kochi-u.ac.jp/international/brochure/>)

高知大学英文広報誌

Welcome to Kochi University

Kochi World of Studies

Wonderful Experience
You can enjoy a variety of activities, from sports to cultural events. You can also enjoy the beautiful scenery of Kochi.

Friendly People
You can make friends with people from all over the world. You can also enjoy the friendly atmosphere of Kochi.

Good Food
You can enjoy delicious food from all over the world. You can also enjoy the traditional food of Kochi.

New Culture Manga
You can enjoy reading manga about the new culture of Kochi. You can also enjoy the traditional culture of Kochi.

Friendly people, fresh food, beautiful scenery. You can enjoy it all at Kochi University!

Student life

Enrolment and Tuition Fees

Enrolment fees and Tuition Fees at Kochi University

| Course | Enrolment Fee | Tuition Fee | Text Book Fee |
|-----------------------------------|----------------------|-------------|---------------|
| Undergraduate students | 100,000 yen one-time | 512,000 yen | 112,000 yen |
| Graduate students | 636,000 yen one-time | 252,000 yen | 30,000 yen |
| Master's degree research students | 275,700 yen one-time | 86,000 yen | 2,000 yen |
| Ph.D. students | 143,800 yen one-time | 28,200 yen | 5,000 yen |

Student Accommodation

The staff at Kochi University will help you find a place to live. We have a list of recommended places to live in Kochi. You can also find a place to live in Kochi through our website.



Entrance Examinations

Entrance examinations for Kochi University are held in January and February. We have a list of recommended places to live in Kochi. You can also find a place to live in Kochi through our website.

Campus Location



Asakura Campus

Faculty of Agriculture and Food Sciences
Faculty of Education
Faculty of Science and Technology
Faculty of Engineering

Oki Campus

Medical School
Faculty of Health Sciences

Monobe Campus

Faculty of Agriculture and Marine Science
Faculty of Business Administration

高知大学 Kochi University
2-5-1 Akita-cho, Kochi 780-8523 Japan
E-mail: info@kochi-u.ac.jp
URL: <http://www.kochi-u.ac.jp/english/>

Welcome to KOCHI UNIVERSITY

高知大学 Kochi University

Enjoy!

Welcome! future students from overseas

Nature

Beautiful mountains, clear rivers and the Pacific Ocean. You can experience unspoiled nature.

Take a leap into the Kochi World of Studies

Let's Study Together!

Over a year, on the President's Land, the distance can mean the difference between a student who is just a student and a student who is a member of the Kochi University family.

Undergraduate Faculties

Faculty of Humanities and Social Sciences

The Faculty of Humanities and Social Sciences is one of the oldest faculties at Kochi University. It has a long history of research and education in the fields of literature, history, sociology, and political science.

Faculty of Education

The Faculty of Education is a faculty that has been established since the founding of Kochi University. It has a long history of research and education in the fields of education and child development.

Faculty of Science and Technology

The Faculty of Science and Technology is a faculty that has been established since the founding of Kochi University. It has a long history of research and education in the fields of science and technology.

Medical School

The Medical School is a faculty that has been established since the founding of Kochi University. It has a long history of research and education in the fields of medicine and health sciences.

Faculty of Agriculture and Marine Science

The Faculty of Agriculture and Marine Science is a faculty that has been established since the founding of Kochi University. It has a long history of research and education in the fields of agriculture and marine science.

Faculty of Regional Collaboration

The Faculty of Regional Collaboration is a faculty that has been established since the founding of Kochi University. It has a long history of research and education in the fields of regional development and community service.

TOSA Innovative Human Development Programs

The TOSA Innovative Human Development Programs are a series of programs that aim to develop the human resources of the Tosa region. They include programs in the fields of agriculture, industry, and community service.

Campus life

University Cafeteria

The University Cafeteria is a place where you can enjoy delicious food and drinks. It is a popular place for students to meet and talk.

Extracurricular Activities

There are many extracurricular activities at Kochi University. You can join a sports team, a music club, or a student organization.

Tutors for International Students

We have a list of tutors who can help you with your studies and life in Kochi. They are experienced students who have been successful in their studies.

Health Service Centre

The Health Service Centre is a place where you can get medical advice and treatment. It is a convenient place for students to go when they are sick.

Integrated Information Centre (Library)

The Integrated Information Centre (Library) is a place where you can find books and other information. It is a convenient place for students to go when they need to study.

University Topics

President Katsutoshi Sakurai delivers keynote address at USR Expo 2018 in Taiwan

At the University Social Responsibility Expo in Taiwan at the National Taiwan University on July 28 and 29, Kochi University president Katsutoshi Sakurai delivered the keynote address discussing his "super regional university" vision. The University Social Responsibility Expo, Taiwan's largest event dedicated to promoting regional collaboration between universities, is a joint initiative of the University Social Responsibility Center, the National Cheng Kung University and the National Taiwan University, under the auspices of the Taiwan Ministry of Education. Sakurai was invited by the Taiwan Ministry of Education to deliver the keynote address on the theme of promoting university collaboration at the regional level. In the keynote address, with the title "Regional Collaboration Towards 'Super Regional University'", Sakurai spoke of the role of universities in promoting innovation and creativity at the regional level, and described specific Kochi University initiatives such as Tosa FBC, University CGC and the COC1 project.



Four students from the Kendo club to represent the Chugoku-Shikoku region at the national student kendo championships

The combined 65th Chugoku-Shikoku Student Kendo Championships and 50th Chu-Shikoku Women's Student Kendo Championships were staged by the Chu-Shikoku University Kendo Federation at the Utsunomiya Bukkan in Utsunomiya prefecture on May 20. Four students from the Kochi University kendo club, three male and one female, were chosen to represent the region at the upcoming national student kendo championships, the pinnacle competition for university-level kendo enthusiasts, which will be held on July 7 and 8 at Nihon Buinkan in Tokyo. The tournament-style championships for the Chu-Shikoku region consists of one-on-one contests between 256 men and 128 women selected from 35 male and 33 female universities in the Federation, and effectively serve as qualifiers for the national championships. After a series of excellent contests, just 16 men and ten women won through to the national championships. This is the first time the Kochi University Kendo Club has had four students at the national championships. The victorious students were (in the male category) Takuma Taniguchi (third year), Kazutoshi Kanoieva (third year), Kaminari Takazawa (first year) and (in the female category) Riko Miura (second year). Interestingly, all are currently studying at the Faculty of Education.



Asakura Campus
Faculty of Humanities and Social Sciences, Faculty of Education
Faculty of Science and Technology, Faculty of Regional Collaboration
TOSA Innovative Program Development Projects
2-5-1 Akabono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan

Oku Campus
Medical School, Medical School Hospital
2-5-1 Akabono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan

Monobe Campus
Faculty of Agriculture and Marine Science
202 Maehata-cho, Nanto City, Kochi, 780-8501 Japan

Happiest memories of Student Exchanges



The summer course was a great opportunity to learn about Japanese culture and language. It was my first time in Japan and I'm so grateful I got to experience Kochi. Through the summer course I got to see some wonderful attractions, such as a cave, a botanical garden and temples. We also got to visit a primary school. I fell in love with the food and admired the kindness that the locals showed. I met new people and got some new friends, who also taught me some important Japanese phrases and customs. I got to experience the typhoon, the sun and a lot of humidity - all in one week. I left Japan wishing I could have seen more, and with a determination to come back. Arigato gozaimasu.

Katsuo Kori
Faculty of Humanities and Social Sciences, Kochi University, Second Year Student

I studied at Inland Norway University of Applied Sciences for six months. As part of the English course I studied English and American Literature and Culture as well as English language. I also did some classes in Norwegian. It was a heavy workload. I had to do preparation before class and revision afterwards, not to mention group work and discussion during class. But I gradually got used to it, and had some great times staying up late talking with other students. There is an enormous difference in daylight hours between summer and winter in northern Europe. Time seems to pass more slowly, and people are much more laid-back. I was lucky to experience a culture and way of life that is totally different to ours in Japan. Northern Europeans are very friendly and everyone was really supportive. Studying overseas has not only contributed to my education, it's been a learning experience for me personally.

Kochi University Annual Bulletin 2018-2019



2-5-1 Akabono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan



CONTENTS

- Kochi University the "Super-Regional" University of the future 1
- Introduction to International Collaboration 3
- The mystery of red tides and ocean viruses 5
- ICCommon first-year subject Introduction to Yosakoi 5
- Wood Chemistry Lab All-new functional paper 6
- University Topics 7



Professor Nagasaki and senior researcher Akihiro Takano monitor images of virus-infected cells with an advanced scanning electron microscope (SEM)

Kochi University the "Super Regional University" for the Future



National University Corporation Kochi University was established on the principle that, "in accordance with the spirit of the Fundamental Law of Education", we shall contribute to both the local and international communities by promoting the development of opportunities for learning and research and the fostering of human resources.

We believe that the proper functions of the university are education, research, and both regional and international collaboration. We are obliged by our own efforts to constantly pursue the goals of self-revitalization and the promotion and expansion of learning on the basis of free creative thinking and on the knowledge that we have inherited from our predecessors. The products of these efforts must always meet the varying needs of society and the times.

Since the National University Corporation system was introduced more than a decade ago, Kochi University has continued to develop its special character. We now aim to

become a Super Regional University, with our main focus set on regional collaboration.

Our guiding principle in education, therefore, is regional collaboration, working with regional communities to help our students learn and grow. Our guiding principle in research is to make use of the great benefits of the Black Current which runs along Kochi's coastline, aiming to tackle natural disasters through interdisciplinary research in all areas of liberal arts and science. Kochi University will produce an even higher standard of practical and academic research and education, while training individuals who can make meaningful contributions to society from local to international levels. Finally, I would like to appeal to you for your heartfelt support and sympathy in the making of our university ever and ever a better one. Thank you.



Professor Katsutoshi Sakurai
President, National University Corporation Kochi University

Born in Osaka prefecture, Graduate in Agricultural Chemistry at Kyoto University, Faculty of Agriculture, then completed a Doctorate in Agriculture at the Kyoto University Graduate School of Agriculture specializing in soil science and regional analysis. Joined Kochi University in 1989. "When I was in high school I didn't really know what I wanted to do. I thought I might end up being a diplomat or a musician. One day, I discovered the seemingly unending world of soil and I was transfixed. And then, before I knew it, I was a soil researcher!"

Practical Studies Seminar Introduction to International Collaboration

「How can we get involved in international collaboration?」

What is collaboration?

Each class is led by a leader from a local NGO or NPO, or a student group here at Kochi University. The leaders introduce their work in a local community or overseas and then talk about the wider implications of volunteering and international collaboration initiatives around the world. Students also explore issues closer to home, such as littering or improper bicycle parking on campus, and work together to define the key problems and consider root causes.

Satoru Ishizutsu teaches Introduction to International Collaboration, a key course component of the Practical Studies Seminar. "When you get to university, there is a distinct shift in emphasis from 'study to research', he explains. "Your job now is to identify a specific topic or problem and then explore ways to address that. The starting point is of course to identify the topic in the first place. And that's what we teach in the Seminar." According to Satoru, students are often overawed by the idea of international collaboration. "They often assume that they have to have good English skills, or that they'll be up against far more experienced researchers, or that international collaboration only happens in other countries. But the reality is quite different. For a start, only a handful of researchers go overseas for joint projects. International collaboration is perfectly achievable right here on the island of Shikoku, in Kochi city. And this is reflected in the subtitle of our program: Developing Global Sustainability Solutions in Shikoku. Students tend to think of international collaboration as a highly specialized exercise, but it is so different to activities and programs that are happening at the local level throughout Japan. If you don't know how to collaborate at the local level, then you won't be any good at international collaboration either. Around 90% of the course content is about the concept of collaboration and the associated principles and techniques."



The importance of on-campus collaboration

Each class is led by a representative from a different local community group active in Japan or overseas, or from one of the student groups here at Kochi University. The representative describes the work of his or her organization and then talks about the wider implications of volunteering and international collaboration initiatives around the world. Students also explore issues closer to home, such as littering and bicycle parking on campus, and work together to define the key problems and consider the root causes.

"Students rightly point out that they shouldn't have to try to address these problems by putting up NO BICYCLE PARKING signs and picking up litter on the campus grounds. And this thought serves as the starting point for



Associate Professor Satoru Ishizutsu
Faculty of Regional Collaboration, Pedagogy Section, Science Division, Faculty of Education and Research

Born in Kanagawa prefecture, Graduated in economics from Nagasaki University before completing a doctorate at the Osaka City University Graduate School of Economics. "My aim is to introduce students to the simple pleasure of putting your mind to something, leading to a range of ideas and learning to accept different opinions and points of view."

The Mystery of Red Tides and Ocean Viruses

Kochi University is part of a major national research project exploring the newly emerging academic discipline of neovirology. Professor Keizo Nagasaki heads the research team on ocean viruses, which is one of the target research topics. We spoke to him about the connection between red tides and viruses.

A single spoonful of seawater contains hundreds of millions of viruses

A spoonful of water from the ocean may not appear to harbor any obvious life forms. But take a closer look with an electron microscope and what do you see?
"A single milliliter of water taken from a bay area can have anything between ten millions and hundreds of millions of viruses held in suspension," notes Professor Keizo Nagasaki, who teaches the Marine Life Sciences program at the Faculty of Agriculture and Marine Sciences. "The ocean of the world is estimated to hold something like 10¹⁹ viruses. This is a staggering number, beyond our comprehension really. And only a minuscule fraction of them are actually known to us." Nagasaki has spent over 25 years studying the role and significance of marine viruses.

Microorganisms such as bacteria propagate by absorbing nutrients from their surroundings and dividing themselves. Viruses, however, cannot propagate on their own, instead they insert their biological instructions into a suitable host and trick the host cells into producing replicas of the virus. This is how diseases such as influenza and the common cold replicate in the human body.

"We tend to think of viruses as malicious actors, things that cause disease," explains Nagasaki. "Indeed, most virology research to date has focused on correlations with disease and illness. But it turns out that the vast majority of viruses do not impact on humans and have no relation to disease whatsoever. In recent years the main focus of virology research has shifted towards viruses that are unrelated to disease."

2016 saw the launch of a new national research project on neovirology. This involves researchers from all over Japan pursuing a variety of studies looking at the importance of viruses to the global ecosystem and their role in relation to the biogenic activity of organisms and ecosystems. Professor Nagasaki heads a consortium of organizations conducting a joint study of marine viruses that includes Kochi University, Kyoto University, Saga University, the Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology (AMSTEC) and the Japan Fisheries Research and Education Agency (FRA).

Viruses in red tide plankton

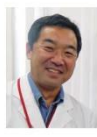
Before joining Kochi University in 2016, Nagasaki was working at the Fisheries Research Agency (FRA), studying viruses that can be used to kill off the plankton associated with red tides. Red tides, which are extremely damaging, occur when plankton numbers increase to such an extent that the water appears to change color. There are many species of plankton associated with red tides.

It was back in 1992, while studying red tide plankton in the Seto Inland Sea with a research institute in nearby Hiroshima, that Nagasaki first discovered that viruses could infect plankton. "The world of viruses is full of mystery," he explains, "but also staggeringly beautiful. I was truly taken aback at the discovery."

Soon after, Nagasaki presented his findings to the Japanese Society of Fisheries Science (JSFS). He explained how the viruses enter plankton cells and start propagating exponentially, and showed a number of electron microscope images. This was the first time that many of his audience had seen such images, and the auditorium was abuzz with excitement. After the presentation, the chairperson, clearly impressed by the presentation, invited everyone to stay on for an impromptu discussion of his research findings.

"I was so excited, I had shivers running down my spine," recalls Nagasaki. "I had no idea how wonderful it feels when people take an interest in your research. That moment will live with me forever." His words illustrate the enthusiasm and commitment of the dedicated scientist.

After the presentation, the chairperson, clearly impressed by the presentation, invited everyone to stay on for an impromptu discussion of his research findings. "I was so excited, I had shivers running down my spine," recalls Nagasaki. "I had no idea how wonderful it feels when people take an interest in your research. That moment will live with me forever." His words illustrate the enthusiasm and commitment of the dedicated scientist.



Professor Keizo Nagasaki
Science and Technology Department,
Natural Sciences Division, Faculty of Education and Research
Born in Okayama. Received doctorate in agriculture from Kyoto University Faculty of Agriculture. Worked on research into red tides and viruses at the Japan Fisheries Agency Kurai Marine Research Station. When promoted into a management role that kept him away from the sea, he returned to his true calling of research, taking up a post at Kochi University. Likes insects and hobbies are tide pools, highballs, Shogi, rummy, angling and dog shows.

The new frontier of Neovirology

Does the virus completely destroy the host?

Since identifying the all-important link between red tide plankton and viruses, Nagasaki has devoted himself whole-heartedly to research in this field. "Children who love collecting insects are more than happy to go out in the middle of the hottest summer to see what they can find. I'm the same. I love going out with my team on a mission to find new viruses. And we have to be quick because you only have about two or three days before the virus kills off the host. It's a challenge, but that's part of what makes it so enjoyable."

Nagasaki published a string of papers on the topic to an eager global audience, and soon he and his team became known as the Algal Virus Hunters. Another key discovery was that the virus does not completely destroy the host plankton as first thought. When a plankton becomes infected, 99% of every 1,000 new cells produced via cell division actually die off, the remaining three form a barrier to fight off the virus, before steadily increasing in number.

"You would assume that the virus and the host would be natural adversaries, but it turns out that they have a more accommodating sort of relationship than that, possibly even allowing the existence of each other to an extent. One of the fascinating parts of virology, something that we don't really understand well at present, is the mechanism by which the virus and host can co-exist."

Uranouchi Bay - Mecca for the red tide research community

Since joining Kochi University, Professor Nagasaki has spent a great deal of his time working at the University's marine biology field station at Uranouchi Bay.
"Uranouchi Bay is a fascinating hunting ground for researchers looking at the phenomenon of red tides, although the bay area is quite small, every year it has multiple red tide events. Many in the research community are thinking that it might have something to do with a new species of plankton that was discovered a while back that kills off brinevates."

The research team generally collects red tide plankton samples by going out on the bay. An outboard engine typically produces a wake of white foam, except when traveling through a red tide, where the wake is full of brown bubbles. When the team spots the brown bubbles, they step the boat and start collecting samples using buckets, hoses and plankton nets. This year they also plan to start collecting plankton samples from airborne droplets.

Nagasaki is happy to extend the virtues of the marine virus research facilities at Kochi University. "The field station is very close to the university campus, so it's the ideal research set-up for us."

And while relatively few universities in Japan are researching viruses in seawater and fresh water, Kochi University last year installed a brand new next-generation sequencer for high-speed genetic base sequence analysis. The University now boasts a convenient and well-equipped field station together with cutting-edge analysis tools in the lab.

"If you join our team, you'll get to meet a veritable plethora of new viruses," says Nagasaki. "There are still so many questions to be answered in the mysterious world of marine viruses. It's an exciting and challenging field, and we're always looking for fresh new talent to be part of our team."

There's every possibility that the red tides of Uranouchi Bay could yield the next great discovery to rock the research community.

The Neovirology Marine Virus research team at Katsurahama beach



SEM images of plankton that act as virus hosts



Waterproof drone for collecting red tide samples



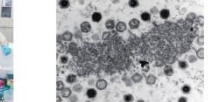
Professor Nagasaki and senior researcher Akihiro Takano monitor images of virus-infected cells with an advanced scanning electron microscope (SEM).



Monitoring program



Monitoring program



Virus particles propagating within a plankton cell

Common first-year subject: Introduction to Yosakoi

New subject to Kochi University

Introduction to YOSAKOI

Comprehensive study of Yosakoi

The Yosakoi Festival is the highlight of summer in Kochi prefecture, a colorful and energetic event that has attracted an enthusiastic fan base well beyond the prefectural border. Today the Yosakoi Festival is held in over 200 locations around the country and even outside Japan. The Introduction to Yosakoi subject, introduced just this year, will be taken by Daisuke Kawatake, who boasts a longstanding connection with the Yosakoi tradition, having been part of the push to start up a Yosakoi Soran Festival in Sapporo during his university days.

"Kochi University has more Yosakoi teams than any other university in Japan, but until now there hasn't been any sort of official push to teach the students about the festival - its origins, how it has evolved over the years, and why its popularity has spread far and wide throughout Japan. This course finally addresses this need."

About 170 students took the course this year, about a third of them had never heard of Yosakoi before. So the course curriculum began with the very basic question: what is the Yosakoi Festival?

"Although it was designed as an introductory subject, we were surprised at the level of interest from third and fourth year students," explains Kawatake. "Quite a few of them had been in the Yosakoi Festival in previous years but wanted to know more about it. I guess it must be a topic of interest to students."

In addition to learning about the origins of Yosakoi, students watch videos of the festival and even practice using the distinctive clappers that are a key part of the festivities.

"Even students who were born and raised right here in Kochi prefecture will tell me afterwards that they learned so many things they never knew about the festival," says Kawatake, "such as how it was created during the grim postwar period as a way to stimulate economic growth. Every class has a report presentation where the students are bound to learn something new."

How can students contribute to Yosakoi?

The Introduction to Yosakoi course had a number of guest presenters, including a representative from a very special group that provides support to people who relocate to Kochi after hearing about Yosakoi, and another person who works to promote the unique Socho Yosakoi Naniwa-odori dance that has been used since the very first Yosakoi Festival. "Meeting with people involved at the grassroots level really brings the course to life, and illustrates all the challenges, the triumphs and the joys associated with the Yosakoi Festival," says Kawatake.

Next year the course will feature more guest presenters discussing the music and costumes of Yosakoi, as well as sponsors and supporters from local industry.

"Learning about the history, background and unique drifting characteristics of the Yosakoi Festival is a great way to introduce students to the idea of in-depth analysis, in this case looking at the dance moves and the meaning behind them. They also gain valuable insights when we study the Yosakoi Soran Festival, for example, and how it was started up by a group of university students who wanted to give back to the local community. We look at the level of commitment from the students and how they worked with the local community to stage the festival at the local sports ground."

Perhaps the Introduction to Yosakoi course will inspire Kochi University students to start their own versions of the Yosakoi Festival. This very special educational initiative is something that is unique to Kochi University.

Daisuke Kawatake
Center for Regional Sustainability and Innovation (CRSI)

Born in Kochi prefecture. Graduated in cultural anthropology from the University of Tokyo College of Arts and Sciences, joined Asahi Shimbun newspaper and served as a local resident in the city of Utsunomiya before returning to Kochi and serving in a number of roles including special secretary to the Governor of Kochi, administrative assistant at the city of Aki and managing director of the Kochi Association of Small Business Owners. Has been at Kochi University since 2016. "I love that the entire university shuts down on August 9 when the Yosakoi Festival gets underway so that everyone, students and teachers alike, can join in the fun."

Labo Report Wood Chemistry Lab

Can you tell me about the work you do at the Wood Chemistry Lab?

Ichihara: We're not interested in actual wood but in the key chemical component of wood, called cellulose, as well as one of the most well-known cellulose products: paper. Paper has traditionally three main purposes, denoted by the three Ws: writing (i.e. printing paper), wiping (such as tissue paper) and wrapping (wrapping paper). The Wood Chemistry Lab is exploring other potential value-added uses of paper; what we call functional paper.

What types of functional paper are you developing?

Ichihara: We are trying to make paper that you can see when it's wet. Paper normally floats apart in water but we've found that if you add enough wet strength agent for improvement of paper strength in wet, the kind that's already found in ordinary tissue paper, it becomes quite usable. However the problem is that the wet strength agent contains chlorine-based chemicals that are harmful to the environment. So now we're going back to the paper production process to see if there are modifications we could make to improve the functionality of the finished product. We're thinking that an activated carbon or photocatalyst additive might have lower environmental impacts.

Research that produces real-world results. That's one of our key aims!

Associate Professor Hideaki Ichihara
Agriculture Section, Natural Sciences Division, Faculty of Education and Research

All-new functional paper What is value-added functional paper?

Are there any other universities working on functional paper?

Ichihara: There aren't many in Japan doing research like ours, no. So when you join the Wood Chemistry Lab, you know you'll be involved in cutting-edge research. And that the work you do will one day be transformed into useful everyday products that benefit us all. We are already working on a number of tie-ups with local paper manufacturers and major diaper suppliers in Kochi prefecture.

Yoshihito, what inspired you to join the Wood Chemistry Lab?

Yamamoto: I grew up in Kochi prefecture surrounded by forests, so the forestry science program at Kochi University was a natural choice, really. Although I didn't have any particular interest in paper at first, I was inspired to learn more about it after hearing Professor Ichihara's lectures on advanced biomass applications.

And what research are you doing at the moment?

Yamamoto: We're working on waterproof paper, as the professor said. We seek sheets of paper in a phosphorylation reaction that is perfectly safe and has minimal environmental impact, to improve the water resistance properties. We study different concentrations of the reagent, then once we find the optimum concentration, we look at the combination of temperature and soak time that produces maximum strength and rigidity. If the paper sheets can be agitated in water without disintegrating or coming apart, then we're happy.

Ichihara: Yoshihito has managed to complete his experiments much faster than I'd expected. He even got to present his findings to local universities from the Chugoku and Shikoku regions at the Japan Wood Research Society conference last September. You often see postgraduate students presenting their final thesis at these conferences, but Yoshihito is the first fourth-year student that I'm aware of who has done it.

That's impressive. So the Wood Chemistry Lab opens up opportunities to present your research to academic conferences.

Ichihara: Of course. Yoshihito will be finishing his graduation thesis soon, which means that he should be presenting to the national conference of the Wood Research Society in Kyoto next March. We're hoping that he might even take on the Poster Prize for outstanding presentations but you'll need to fill out your presentation just a bit more, Yoshihito.

Yamamoto: Yes indeed, I'll need to dig a bit deeper into the key topic of the thesis and make sure that I stay on topic.

It's so great when your carefully designed experiment delivers the results you were expecting!

Student Yoshihito Yamamoto
4th year student (as of writing) in Forestry Science program, as part of major in agriculture at Faculty of Agriculture

About the Forestry Science program: Forests promote carbon dioxide circulation and supply nutrients to the oceans. Kochi prefecture boasts an incredible diversity of forest ecosystems. From traditional tea fields to natural forest reserves, we are promoting the local environment to study the natural impacts of forests on local ecosystems and the principles of good forest care and management, and consider how we can utilize our finite resources in the modern era.

高知大学留学生教育

第12号

『高知大学留学生教育』第12号の刊行に寄せて
—「地域の大学」と国際協力—

新納 宏

[特別寄稿]

「わたしはマイク・ミラーです」を再考する
—日本語コーパスの教育応用をめぐって—

石川慎一郎

[研究ノート]

留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした
体験学習型授業の構築

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ

高大連携による地域文化体験を通じた交流学習活動の教育効果
—地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として—

大塚薫・林翠芳

[研究報告]

英語を理解する外国人技能実習生のための地域語テキストの作成
—高知県香美市の場合—

今井多衣子

JICA研修を通じた「深い学び」を導くアクティブ・ラーニングと
インタラクティブ・ティーチングの実践による効果検証

岡本 葉子

2018年12月

高知大学 国際連携推進センター

高知大学国際交流 HP

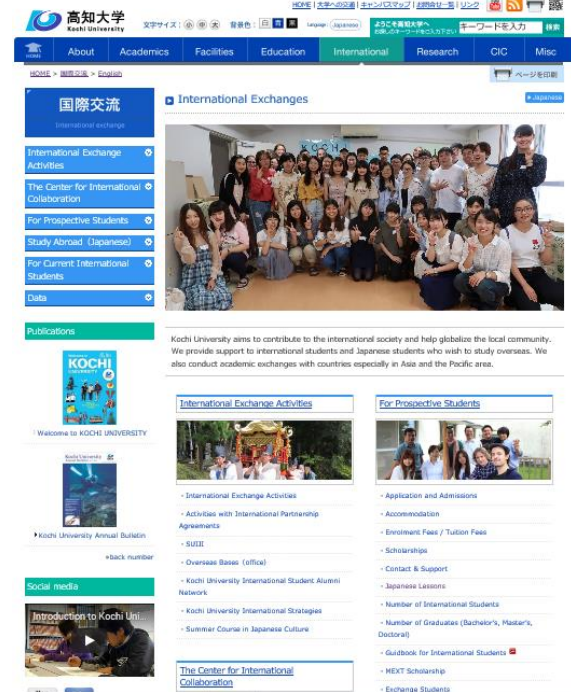
日本語版：

<http://www.kochi-u.ac.jp/international/index.html>



英語版：

<http://www.kochi-u.ac.jp/international/english/index.html>



Facebook (高知大学 国際連携推進センター)

<https://www.facebook.com/kochiuniversity.international/>



7.会議関連

国際連携推進センター運営戦略室会議名簿

国際連携推進委員会名簿

留学生専門委員会名簿

平成30年4月1日

平成30年度国際連携推進センター運営戦略室会議名簿

| | | | |
|-----|-------|--------------|--------|
| ◎議長 | 新納 宏 | センター長 | 第2条第1項 |
| 委員 | 池島 耕 | 副センター長 | 第2条第2項 |
| 委員 | 井上 顕 | 国際プロジェクト外部部長 | 第2条第3項 |
| 委員 | 林 翠芳 | 国際連携教育部門長 | 第2条第3項 |
| 委員 | 渡邊 博善 | 研究国際部長 | 第2条第4項 |
| 委員 | 遠藤 隆俊 | 副学長（国際連携担当） | 第2条第5項 |

平成 30 年 10 月 1 日

国際連携推進委員会名簿

| | 部局・職名 | 氏名 | 任期 | 備考 |
|-----------------------------|--------------------------------|--------|--------------------|----|
| | 副学長（国際連携担当） | 遠藤 隆俊 | | |
| | 国際連携推進センター長 | 新納 宏 | | |
| | 大学教育創造センター長 | 小島 郷子 | | |
| | 学生総合支援センター長 | 岩崎 貢三 | | |
| | 総合研究センター長 | 大西 浩平 | | |
| | 次世代地域創造センター長 | 受田 浩之 | | |
| | 国際連携推進センター副センター長 | 池島 耕 | | |
| | 国際連携推進センター国際プロジェクト部門長 | 井上 顕 | | |
| | 国際連携推進センター国際連携教育部門長 | 林 翠芳 | | |
| | 人文社会科学部選出教員 | 周 雲喬 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 教育学部選出教員 | 長谷川 雅世 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 理工学部選出教員 | 梶芳 浩二 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 医学部選出教員 | 小林 道也 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 農林海洋科学部選出教員 | 島崎 一彦 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 地域協働学部選出教員 | 大槻 知史 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 黒潮圏総合科学専攻選出教員 | 新保 輝幸 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | センター連絡調整会議選出教員（国際連携推進センター長が兼務） | 新納 宏 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 土佐さきがけプログラム選出教員 | 柴田 雄介 | 30. 4. 1～32. 3. 31 | |
| | 研究国際部長 | 渡邊 博善 | | |
| その他委員長が必要と認め | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| 委員 18 名（定足数は 2 分の 1 以上：9 名） | | | | |

高知大学国際連携推進委員会留学生専門委員会名簿

平成 30 年 4 月 1 日

| 部局・職名 | | 氏名 | 任期 | 備考 |
|--------------------|-----------------------|--------------------|----------------|----|
| 1 | 国際連携推進センター長 | 新納 宏 | | |
| 2 | 国際連携推進センター副センター長 | 池島 耕 | | |
| 3 | 国際連携推進センター国際プロジェクト部門長 | 井上 顕 | | |
| 4 | 国際連携推進センター国際連携教育部門長 | 林 翠芳 | | |
| 5 | 国際連携推進センター専任担当教員 | 神埼 道太郎 | | |
| 6 | 国際連携推進センター専任担当教員 | 林 翠芳 | | |
| 7 | 国際連携推進センター専任担当教員 | 大塚 薫 | | |
| 8 | 国際連携推進センター専任担当教員 | Eva Garcia del Saz | | |
| 9 | 人文社会科学部選出教員 | 周 雲喬 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 10 | 教育学部選出教員 | 長谷川 雅世 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 11 | 理工学部選出教員 | 福間 慶明 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 12 | 医学部選出教員 | 小林 道也 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 13 | 農林海洋科学部選出教員 | 島崎 一彦 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 14 | 地域協働学部選出教員 | 大槻 知史 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 15 | 黒潮圏総合科学専攻選出教員 | 関田 論子 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 16 | 土佐さきがけプログラム教員 | 柴田 雄介 | 30.4.1~32.3.31 | |
| 17 | 国際交流室長 | 門脇 英雄 | | |
| 18 | 学生支援課長 | 水間 貫了 | | |
| その他委員長が必要と認められた者 | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| 委員 18 名 (定足数 12 名) | | | | |

8. その他

海外協定校（大学間・部局間協定一覧表）

外国人留学生在籍（国別）

外部資金獲得状況

大学間協定一覧表(平成30年4月1日現在)

| NO | 相手機関名 | 国名・地域名 | 締結年月日 | 内容 | 中心部局 |
|----|---------------------------|-------------|------------|------------|-------------|
| 1 | クイーンズランド大学 | オーストラリア連邦 | 1980.10.01 | 学生交流 | 国際連携推進センター |
| | | | 1980.11.07 | 学術交流 | |
| 2 | 佳木斯大学 | 中華人民共和国 | 1985.10.22 | 学術交流及び学生交流 | 医学部 |
| 3 | カリフォルニア州立大学フレズノ校 | アメリカ合衆国 | 1989.04.01 | 学術交流及び学生交流 | 国際連携推進センター |
| 4 | 陝西科技大学 | 中華人民共和国 | 1994.07.26 | 学術交流及び学生交流 | 理工学部 |
| 5 | 揚州大学 | 中華人民共和国 | 1997.03.10 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |
| 6 | コンケン大学 | タイ王国 | 1997.03.27 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 7 | 南ボヘミア大学 | チェコ共和国 | 1999.06.23 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 8 | チェコ科学アカデミー生物学センター | チェコ共和国 | 1999.06.24 | 学術交流 | 教育学部 |
| 9 | カセサート大学 | タイ王国 | 2000.05.01 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 10 | 安徽大学 | 中華人民共和国 | 2002.05.21 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 11 | ハノイ科学工業大学 | ベトナム社会主義共和国 | 2002.07.02 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 12 | ハノイ科学大学 | ベトナム社会主義共和国 | 2002.07.02 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 13 | ブラビジャヤ大学 | インドネシア共和国 | 2003.02.28 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 14 | 漢陽大学校 | 大韓民国 | 2003.06.26 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 15 | 韓瑞大学校 | 大韓民国 | 2003.07.23 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 16 | 国立ポリテク工科大学 応用研究所, サルティジョ校 | メキシコ合衆国 | 2003.09.08 | 学術交流及び学生交流 | 理工学部 |
| 17 | サルティジョ工科大学 | メキシコ合衆国 | 2003.09.09 | 学術交流及び学生交流 | 理工学部 |
| 18 | チェンデラワシ大学 | インドネシア共和国 | 2004.09.28 | 学術交流及び学生交流 | 医学部 |
| 19 | 瀋陽薬科大学 | 中華人民共和国 | 2005.05.12 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 20 | フィリピン大学 | フィリピン共和国 | 2005.11.24 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 21 | ハノイ国立教育大学 | ベトナム社会主義共和国 | 2006.01.06 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |
| 22 | イェーテボリ大学 | スウェーデン王国 | 2006.02.27 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 23 | ピコール大学 | フィリピン共和国 | 2006.03.31 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 24 | 河南大学 | 中華人民共和国 | 2006.04.10 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 25 | 常州大学 | 中華人民共和国 | 2006.12.20 | 学術交流及び学生交流 | 理工学部 |
| 26 | 天津師範大学 | 中華人民共和国 | 2006.12.28 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 27 | ボゴール農業大学 | インドネシア共和国 | 2007.03.01 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 28 | マレーシアプトラ大学 | マレーシア | 2007.05.18 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 29 | 国立中山大学 | 台湾 | 2007.05.14 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 30 | 東海大学 | 台湾 | 2007.10.18 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 31 | スリウィジャヤ大学 | インドネシア共和国 | 2008.03.11 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |
| 32 | 金剛大学校 | 大韓民国 | 2008.12.09 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 33 | 南京航空航天大学 | 中華人民共和国 | 2009.11.12 | 学術交流及び学生交流 | 理工学部 |
| 34 | マレーシアサラワク大学 | マレーシア | 2009.11.24 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 35 | ハルオレオ大学 | インドネシア共和国 | 2009.12.16 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 36 | 中国文化大学 | 台湾 | 2010.01.20 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 37 | タンジュンプラ大学 | インドネシア共和国 | 2010.02.01 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 38 | 白石大学校 | 大韓民国 | 2010.03.25 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 39 | 上海海洋大学 | 中華人民共和国 | 2010.10.15 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 40 | 南マツグロツ連邦大学 | ブラジル共和国 | 2012.03.13 | 学術交流 | 医学部 |
| 41 | 明知大学校 | 大韓民国 | 2013.01.03 | 学術交流及び学生交流 | 国際連携推進センター |
| 42 | チェンマイ大学 | タイ王国 | 2013.02.12 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |
| 43 | サッサリ大学 | イタリア | 2013.02.21 | 学術交流及び学生交流 | 地域協働学部 |
| 44 | 国立慶尚大学校 | 大韓民国 | 2013.03.04 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 45 | 北京聯合大学 | 中華人民共和国 | 2013.03.11 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 46 | アイルランド王立外科医学院パーレーン医科大学 | パーレーン王国 | 2013.03.21 | 学術交流 | 医学部 |
| 47 | 北京外国語大学 | 中華人民共和国 | 2013.06.21 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 48 | 東国大学校 | 大韓民国 | 2013.07.03 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 49 | タマサート大学 | タイ王国 | 2013.08.20 | 学術交流及び学生交流 | 理工学部 |
| 50 | 国立東華大学 | 台湾 | 2013.08.27 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 51 | アラビア湾岸諸国立大学 | パーレーン王国 | 2014.02.13 | 学術交流 | 医学部 |
| 52 | ハンゼ応用科学大学 | オランダ | 2015.03.09 | 学術交流及び学生交流 | 土佐さきがけプログラム |
| 53 | タイグエン大学 | ベトナム社会主義共和国 | 2015.03.25 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 54 | 東北大学秦皇島分校 | 中華人民共和国 | 2015.04.15 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 55 | ロードアイランド大学 | アメリカ合衆国 | 2015.06.17 | 学術交流及び学生交流 | 土佐さきがけプログラム |
| 56 | ガーナ大学 | ガーナ共和国 | 2015.09.09 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 57 | インランドノルウェー応用科学大学 | ノルウェー王国 | 2015.12.03 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 58 | テキサス大学ダラス校 | アメリカ合衆国 | 2016.02.04 | 学術交流 | 土佐さきがけプログラム |
| 59 | パルティド州立大学 | フィリピン共和国 | 2017.12.18 | 学術交流及び学生交流 | 黒潮圏 |
| 60 | リア外国語大学ジャカルタ校 | インドネシア共和国 | 2018.01.02 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 61 | カザフ国立大学 | カザフスタン共和国 | 2018.02.27 | 学術交流及び学生交流 | 医学部 |
| 62 | ビン大学 | ベトナム社会主義共和国 | 2018.03.29 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |

部局間協定一覧表(平成30年4月1日現在)

| NO | 大学名 | 国名・地域名 | 締結年月日 | 内容 | 担当部局 |
|----|----------------------------------|-------------|------------|------------|----------|
| 1 | タイ 農林水産省水産庁 | タイ王国 | 2001.11.26 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |
| 2 | 首都医科大学口腔医学院 | 中華人民共和国 | 2004.10.28 | 学術交流 | 医学部 |
| 3 | 釜山外国語大学校日本語大学 | 大韓民国 | 2007.03.08 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 4 | 韓国地質資源研究院石油海洋資源部 | 大韓民国 | 2007.08.08 | 学術交流 | 海洋コア |
| 5 | フィリピン農業省漁業・水産資源局第2地域支所 | フィリピン共和国 | 2007.08.24 | 学術交流 | 黒潮圏 |
| 6 | 天津科技大学経済与管理学院 | 中華人民共和国 | 2008.04.04 | 学術交流 | 人文社会科学部 |
| 7 | ロモノソフ初等中等高等学校 | ベトナム社会主義共和国 | 2008.12.01 | 学術交流 | 教育学部 |
| 8 | 中国科学院地球環境研究所 | 中華人民共和国 | 2009.09.29 | 学術交流 | 海洋コア |
| 9 | パドバ大学理工学部 | イタリア | 2010.01.20 | 学術交流 | 理工学部 |
| 10 | ハワイ大学医学部 | アメリカ合衆国 | 2010.02.10 | 学術交流 | 医学部 |
| 11 | モナッシュ大学サステナブルケミカルマニュファクチャリングセンター | オーストラリア連邦 | 2010.08.09 | 学術交流 | 理工学部 |
| 12 | スウェーデン王国オイレショー特別学校 | スウェーデン王国 | 2011.02.15 | 学術交流 | 教育学部 |
| 13 | 浙江大学生物系統工程及び食品科学学院 | 中華人民共和国 | 2011.04.18 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 14 | 国立台湾大学医学部 | 台湾 | 2011.10.11 | 学術交流及び学生交流 | 医学部 |
| 15 | モンゴル・ロシア共同学校 | モンゴル国 | 2012.06.05 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 16 | 中国地質大学資源学院 | 中華人民共和国 | 2012.08.14 | 学術交流 | 理工学部 |
| 17 | シェレバングラ農科大学 | バングラデシュ | 2012.10.08 | 学術交流及び学生交流 | 農林海洋科学部 |
| 18 | カリヤニ大学 | インド | 2012.10.10 | 学術交流 | 総合研究センター |
| 19 | 韓国中央大学赤十字看護学部 | 大韓民国 | 2014.02.21 | 学術交流 | 医学部 |
| 20 | ユバスキュラ大学教育学部 | フィンランド共和国 | 2015.12.10 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 21 | パレストラ体育スポーツ大学 | チェコ共和国 | 2016.01.26 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 22 | メトロポリタン大学社会科学教育学部学校学習研究所 | デンマーク王国 | 2016.08.15 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 23 | 高雄大学人文社会科学部 | 台湾 | 2016.09.21 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 24 | オーフス大学教養学部 | デンマーク王国 | 2016.09.22 | 学術交流 | 教育学部 |
| 25 | 開南大学 | 台湾 | 2016.11.29 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 26 | 北京語言大学 | 中華人民共和国 | 2016.12.19 | 学術交流及び学生交流 | 人文社会科学部 |
| 27 | ソクラーナカリン大学 | タイ王国 | 2017.7.9 | 学術交流及び学生交流 | 医学部 |
| 28 | チェコ共和国科学アカデミー微生物学研究所 | チェコ共和国 | 2017.08.09 | 学術交流 | 農林海洋科学部 |
| 29 | 樹人医護管理専科学校 | 台湾 | 2018.01.09 | 学術交流及び学生交流 | 教育学部 |
| 30 | セメイ国立医科大学 | カザフスタン共和国 | 2018.02.21 | 学術交流及び学生交流 | 医学部 |

| 項目 国名・地域名 | | 国費 | | | | | | | | 小計 | 私費 | | | | | | | | 小計 | 計 | | 合計 |
|----------------|--------------|----|---|----|---|----|----|------|----|----|----|---|----|----|----|----|------|-----|----|----|-----|----|
| | | 学部 | | 修士 | | 博士 | | 研究生等 | | | 学部 | | 修士 | | 博士 | | 研究生等 | | | 男 | 女 | |
| | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | | | | | | |
| アジア | インド | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | 2 | 2 | | 2 | |
| | インドネシア | | | | | 2 | | | 2 | | | | | 1 | 1 | 4 | 3 | 9 | 5 | 6 | 11 | |
| | カンボジア | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| | タイ | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| | ネパール | | | | | | | | | 2 | 1 | | | 2 | | | | 5 | 4 | 1 | 5 | |
| | バングラデシュ | | | | | 4 | 1 | | 5 | | | 1 | | 1 | 1 | | | 3 | 6 | 2 | 8 | |
| | フィリピン | | | | | 2 | 5 | | 7 | | | | | | | | | | 2 | 5 | 7 | |
| | ベトナム | | | | | | | | | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | | | | 7 | 4 | 3 | 7 | |
| | マレーシア | | | | | | | | | 1 | 2 | | | | 1 | | | 4 | 1 | 3 | 4 | |
| | ミャンマー | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | | 1 | |
| | モンゴル | | | | | | | | | 1 | 3 | | 1 | | | | | 5 | 1 | 4 | 5 | |
| | 韓国 | | | | | | | | | 3 | | | | | | 4 | 6 | 13 | 7 | 6 | 13 | |
| | 台湾 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | 1 | 5 | 8 | 2 | 6 | 8 | |
| | 中国 | | | 1 | | 1 | 3 | | 5 | 10 | 3 | 2 | 5 | 1 | 1 | 6 | 21 | 49 | 21 | 33 | 54 | |
| 北米 | アメリカ | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 | 1 | |
| 南米 | アルゼンチン | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| ヨーロッパ | スウェーデン | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | 2 | 2 | | 2 | |
| | デンマーク | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | |
| | フランス | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | | 1 | |
| | ロシア | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | |
| アフリカ | エチオピア | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| | ガーナ | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| | コンゴ民主共和国 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | | 1 | |
| | ブルキナファソ | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | 1 | | 1 | |
| 総計 | | | | 1 | 1 | 9 | 12 | 2 | 25 | 18 | 12 | 8 | 8 | 10 | 4 | 19 | 36 | 115 | 67 | 72 | 140 | |
| 学部 | 人文学部/人文社会科学部 | | | | | | | | | 7 | 5 | | | | | 3 | 12 | 27 | 10 | 17 | 27 | |
| | 教育学部 | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | 8 | 10 | 20 | 10 | 11 | 21 | |
| | 理学部/理工学部 | | | | | | | | | 6 | 2 | | | | | 1 | 3 | 12 | 7 | 5 | 12 | |
| | 農学部/農林海洋科学部 | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 2 | | | | | 3 | 8 | 14 | 5 | 10 | 15 | |
| | 地域協働学部 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | |
| | 土佐さががけプログラム | | | | | | | | | 3 | 2 | | | | | | | 5 | 3 | 2 | 5 | |
| 大学院総合人間自然科学研究科 | 人文社会科学専攻 | | | | 1 | | | | 1 | | | | 2 | | | | 2 | 4 | | 5 | 5 | |
| | 教育学専攻 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 理学専攻 | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| | 応用自然科学専攻 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | | 1 | |
| | 医科学専攻 | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | 2 | | 2 | 2 | |
| | 医学専攻 | | | | | 2 | 1 | | 3 | | | | | 2 | 1 | | | 3 | 4 | 2 | 6 | |
| | 農学専攻 | | | | | | | | | | | 8 | 4 | | | 3 | | 15 | 11 | 4 | 15 | |
| 黒潮圏総合科学専攻 | | | | | 3 | 5 | | 8 | | | | | 3 | | | | 3 | 6 | 5 | 11 | | |
| 愛媛大学大学院連合農学研究科 | | | | | | 4 | 6 | | 10 | | | | | 4 | 3 | 1 | | 8 | 9 | 9 | 18 | |
| 総計 | | | | 1 | 1 | 9 | 12 | 2 | 25 | 18 | 12 | 8 | 8 | 10 | 4 | 19 | 36 | 115 | 67 | 73 | 140 | |

国際関係外部資金 申請採択状況

| 申請年度 | 機関名 | 事業名 | 申請年月 | 申請件数 | 採択件数 | 採択金額 | |
|----------------------------|--|--|--|-------------------------------------|------------------------|--|---|
| 平成30年度 | (独)日本学術振興会 | 外国人特別研究員(一般)平成30年度第2回 | 平成30年4月 | 理工学部 医学部 | 1 1 | 0 0 | |
| | | 外国人特別研究員(一般)平成31年度第1回 | 平成30年9月 | 農林海洋科学部 海洋コア | 1 1 | 0 0 | |
| | | 外国人招へい研究者(長期)平成31年度 | 平成30年9月 | 医学部 農林海洋科学部 | 1 1 | 0 0 | |
| | | 外国人招へい研究者(短期)平成31年度第1回 | 平成30年9月 | 医学部 農林海洋科学部 | 1 1 | 0 滞在費18,000円/日 国際航空券・海外旅行 保険 調査研究費150,000円 | |
| | | 外国人特別研究員(欧米短期)平成31年度第1回 | 平成30年10月 | 農林海洋科学部 | 1 | 0 | |
| | | 平成31年度サマープログラム | - | 海洋コア | 1 | 1 | 渡航費 滞在費534,000円 調査研究費158,500円 |
| | | 二国間交流事業共同研究・セミナー 平成31年度 | 平成30年9月 | 人文社会科学系 医学部 総合科学系 | 1 1 3 | 0 0 0 | |
| | 国立研究開発法人 科学技術振興機構 | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成30年度第2回募集 | 平成30年4月 | 黒潮圏総合科学専攻 | 1 | 0 | |
| | | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成30年度第3回募集 | 平成30年8月 | 黒潮圏総合科学専攻 | 1 | 1 | 2,729,669円 |
| | (独)日本学生支援機構 | 平成31年度海外留学支援制度(協定派遣) | 平成30年10月 | SUIJI推進室 地域協働学部 | 1 1 | 1 | 1,960,000円 240,000円 |
| | | 平成31年度海外留学支援制度(協定受入) | 平成30年10月 | 地域協働学部 | 1 | 1 | 800,000円 |
| | 平成29年度 | (独)日本学術振興会 | 外国人特別研究員(一般)平成29年度第2回 | 平成29年4月 | 理工学部 農林海洋科学部 医学部 | 1 1 2 | 0 1 0 |
| 外国人特別研究員(一般)平成30年度第1回 | | | 平成30年1月 | 海洋コア | 1 | 0 | |
| 外国人招へい研究者(短期)平成29年度第2回 | | | 平成29年4月 | 医学部 | 1 | 1 | 滞在費18,000円/日 国際航空券・海外旅行 保険 調査研究費150,000円 |
| 外国人招へい研究者(短期)平成30年度第1回 | | | 平成30年1月 | 農林海洋科学部 | 1 | 0 | |
| 外国人特別研究員(欧米短期)平成29年度第3回 | | | 平成29年4月 | 農林海洋科学部 | 1 | 0 | |
| 平成29年度サマープログラム | | | - | 理工学部 | 1 | 1 | 渡航費 滞在費534,000円 調査研究費158,500円 |
| 二国間交流事業共同研究・セミナー 平成30年度 | | | 平成29年9月 | 海洋コア 農林海洋科学部 | 2 2 | 1 0 | 1,956,080円 |
| 国立研究開発法人 科学技術振興機構 | | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成29年度第2回募集 | 平成29年4月 | 黒潮圏総合科学専攻 | 1 | 1 | 2,613,358円 |
| | | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成29年度第3回募集 | 平成29年7月 | 農林海洋科学部 | 1 | 1 | 3,313,772円 |
| (独)日本学生支援機構 | | 平成30年度海外留学支援制度(協定派遣) | 平成29年10月 | SUIJI推進室 教育学部 地域協働学部 | 1 2 2 | 1 0 1 | 1,960,000円 240,000円 240,000円 |
| | | 平成30年度海外留学支援制度(協定受入) | 平成29年10月 | 黒潮圏総合科学専攻 地域協働学部 | 1 1 | 0 1 | 1,200,000円 |
| | | | | | | | |
| 平成28年度 | (独)日本学術振興会 | 外国人特別研究員(一般) 平成28年度第2回 | 平成28年4月 | 農林海洋科学部 海洋コア 医学部 | 1 1 1 | 0 0 0 | |
| | | 外国人特別研究員(一般)平成29年度第1回 | 平成28年8月 | 医学部 | 2 | 0 | |
| | | 外国人招へい研究者(短期) 平成28年度第2回 | 平成28年4月 | 農林海洋科学部 | 1 | 0 | |
| | | 外国人招へい研究者(短期) 平成29年度第1回 | 平成28年8月 | 理学部 農林海洋科学部 地域協働学部 | 1 1 1 | 0 1 1 | 滞在費18,000円/日 国際航空券・海外旅行 保険 調査研究費150,000円 |
| | | 二国間交流事業共同研究・セミナー 平成29年度 | 平成28年9月 | 医学部 総合研究センター | 1 1 | 0 0 | |
| | | 国立研究開発法人 科学技術振興機構 | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成28年度第2回募集 | 平成28年7月 | 黒潮圏総合科学専攻 | 1 | 0 |
| | (独)日本学生支援機構 | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成28年度第3回募集 | 平成28年10月 | 黒潮圏総合科学専攻 | 1 | 1 | 2,536,578円 |
| | | 平成29年度海外留学支援制度(協定派遣) | 平成28年10月 | 全学 教育学部 地域協働学部 土佐さきがけプログラム | 1 1 2 1 | 1 1 1 0 | 2,800,000円 240,000円 240,000円 0 |
| | | 平成29年度海外留学支援制度(協定受入) | 平成28年10月 | 地域協働学部 土佐さきがけプログラム | 2 1 | 1 0 | 1,200,000円 |
| | | 平成28年度帰国外国人留学生短期研究制度 | 平成28年12月 | 農林海洋科学部 | 1 | 1 | 滞在費11,000円/日 往復航空券 受入協力費50,000円 |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| 平成27年度 | (独)日本学術振興会 | 外国人特別研究員(一般) 平成27年度第2回 | 平成27年5月 | 農学部 医学部 | 2 1 | 0 0 | |
| | | 論文博士号取得希望者に対する支援事業 平成28年度 | 平成27年8月 | 農学部 | 1 | 0 | |
| | | 外国人招へい研究者(長期) 平成28年 | 平成27年8月 | 農学部 総合研究センター | 1 1 | 0 1 | 3,876,000円 国際航空券 海外旅行保険 |
| | | 外国人特別研究員(一般) 平成28年度第1回 | 平成27年8月 | 農学部 | 1 | 0 | |
| | | 外国人特別研究員(推薦) | - | 理学部 | 1 | 1 | 8,888,000円 往復航空券 海外旅行保険 |
| | | 二国間交流事業共同研究・セミナー 平成28年度 | 平成27年9月 | 海洋コア 農学部 医学部 | 1 1 1 | 1 0 0 | 2,400,000円 |
| | | 二国間交流事業共同研究・セミナー 平成27年度 | 平成27年9月 | 総合研究センター | 1 | 1 | 2,500,000円 |
| | | (独)日本学術振興会・公益社団法人 日本工学会アカ デミー | 日豪若手研究者交流促進事業 平成27年度 | 平成27年4月 | 理学部 | 1 | 0 |
| | 国立研究開発法人 科学技術振興機構 | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成27年度第2回募集 | 平成27年6月 | 黒潮圏総合科学専攻 | 1 | 1 | 2,869,790円 |
| | | 日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン) 平成28年度第1回募集 | 平成28年3月 | 農学部 | 1 | 1 | 3,187,360円 |
| | (独)日本学生支援機構 | 平成28年度帰国外国人留学生短期研究制度 | 平成27年12月 | 農学部 総合研究センター | 1 1 | 1 0 | 990,000円 往復航空券 |
| | | 平成28年度海外留学支援制度(協定派遣) | 平成27年10月 | 地域協働学部 | 1 | 1 | 450,000円 |
| 平成28年度海外留学支援制度(協定受入) | | 平成27年10月 | 地域協働学部 | 2 | 2 | 1,760,000円 | |
| 一般財団法人 日本国際協力センター | 公益財団法人中島記念国際交流財団助成による平成28年度留学生地 域交流事業 | 平成28年3月 | 国際連携推進センター | 1 | 0 | | |
| | 対日理解促進交流プログラム(北米事業KAKEHASHI派遣プログラム) | 平成27年9月 | 全学 | 1 | 1 | 学生13名派遣 | |